る眞理の區域内ゑ人智の推量を交へ、或い不易なる神言を人智の想像より出でたる思考と比較して、眞理の神を褻瀆せざらんおとを敎ふれバ也。苟も說敎者い神の代理者として講說する者なるが故に、其說敎い必す預言者の言へるが如く『主ハ斯ク言フ』『或は『主曰ク』と宣べざるべからゞ、然るを說敎者若し此時に當りて己の智慧感情よりして述ぶるが如きとあらバ、是れ則ち主に對して僞の證を立つる者也。

（ウ）或眞理を述ぶるゑ當りて其眞理を過大ゑし、或い之を過小にすると也。此弊害い特に德義に關する說敎中ゑ多く發見する所にして、斯の如き欠點い即ち神聖たるべき福音の要求、並ゑ種々の惡癖及善行を正當ゑ理解せざる時ゑ於て現いるゝものとす。總て神の行爲にまれ、神言ゑまれ、亦万事ゑまれ、悉く皆適度際限あるものなれバ、說敎に於ても亦宜しく此ゑ注意せざるべからゞ。若し之に反して福音の誡命の嚴格なる

を一層過大ゑする時い、乃ち自然『生命ニ至ル窄ク且ツ小サキ路ヲ』（マトフェイ七ノ十四）一層小なるものゝ如く想像せしめ、竟ゑ之が爲ゑ自から生命を得るものゝ小數なるが上ゑ增々其數を減少界限せんことを勉むるに該當するなり。彼のイウデヤ民に負いしむるゑ堪へ難き重荷を以てして、自からい一指だも之ゑ觸るゝことを欲せざりし敎師輩い曾て斯の如く行へり、故ゑ主は彼等ゑ向て『禍ナル哉』（マトフェイ廿三章）と嘆せられたり。又福音の德義法を說くゑ當りて其眞意を過小ゑし、却て救贖の困難なることを掩蔽する時い、乃ち斯の如きおとなくしてさへ『沈淪ニ至ル濶キ路』を自ら擴張して、之ゑ入る者の大數なるを益々增加せしむるに當るなり。曾て彼の僞預言者等は斯の如く行へり、故ゑ主は己の眞實なる預言者を遣はして最も恐るべき訓戒を述べられたり、曰く『枕ヲ以テ諸〻ノ手指ノ下ニ縫ヒ、幪ヲ以テ人ノ靈ヲ獵ラントト欲スル者ハ禍ナル哉』（イエゼキイリ十三

八ノ十）と。又或惡癖を過大にし、若くハ過小ゝする其罪の重きが如く、或善行の能力、功德を過大にし、或ハ之を過小ゝするも亦其罪重大なりとす。假令ひ其事は明かに聽衆をして大に罪過を避けしめ、最も活潑ゝ善行ゝ進ましめ、又或一方ゝは憂悶を預戒し、他の一方に向ては疑念を預防せんとするの善慮を以て爲しゝゝるもせよ、斯の如き說敎は毫も聽衆の敎化ゝ益なく、又敎化すること能はざるものとす。蓋し此中ゝハ常ゝハリストス敎の精神に反對せる虛僞の精神の存するゝ由る、ハリストス敎會ハ決して斯の如き不義の方法を以て人を正義ゝ導かんとする報告者を以て己の同勞者とするゝとを肯せざる也。

第六十九章　說敎の救贖的たるべき事の定義

凡そ聖書ハ咸く救贖的ゝ外ならず、蓋し神の啓示ハ吾人をして完全ならしめ、又吾人を救ハんが爲に神より賜ハりたるものなれバ也。されバ

說敎に於ても亦萬事を救贖の一点ゝ向はしめざるべからず。即ち說敎者の責任は力めて聽衆ゝ多くの智識を與ふるとゝあらざ、其傳ふる所の萬事は皆聽衆をして救贖の善果を結ばしむるゝあり。人若し信仰上の問題ゝ關して大に智識を增進することあるも、德義上及心靈上ゝ於て益々善良完美なる結果を得るゝ非れバ、靈魂の爲ゝ益する所多からず、何となれバ凡そ智識は人の心靈的德義の開發ゝ應用する程度に從て其價値を定むべきものなるも、事實上最も確實なるとゝして、之と同時に毫も吾人の德義を完成するゝ裨益なきもの甚多けれバ也。されバ說敎者は何事を敎ふるゝも、常ゝ其說敎は聽衆の救贖ゝ外ならざるとを忘るべからざ。

第七十章　說敎に必要なる救贖的の精神ハ何處より汲得するや

聖書に曰く『救主ハリストスノ名ハ外別ニ救ナシ、蓋シ天下ノ人更ニ他

ノ名ヲ賜ヒテ我儕ヲシテ之ニ由テ救ヲ得ベカラシムルナシ』(使徒行實四ノ十二)と。是ゝ由て之を觀れば、說敎に必要なる救贖的の精神を汲得せんにハ、贖罪主のことゝ關する敎を曾得するに若くものあるなし、是を以て說敎者ハ使徒が司祭の本分ゝ就きて述べたるが如く凡そ說敎中ゝはイエスス、ハリストスゝ係る智識を注射し、彼ゝ關する敎を感得し、彼の至仁なることを確認せしめ、及ハリストスは獨り神よりする所の睿智、公義、成聖、更新なることを勸說せざるべからぎ(コリンフ前書一ノ二十)、即ち悉くの敎訓を主ハリストスに基けざるべからぎ。何となれば聖なる敎及永遠の福樂を論ずるゝ當りて苟もイエスス、ハリストスゝ於ける信仰に基かざる時は、萬般の事皆竟ゝ其果實を結ばぎして、救贖に益なければなり(本書三十七章を參看せよ)。是ゝ由て聖使徒を亦コリンフ人ゝ向て『我レ意ヲイエスス、ハリストスニ定ム、即チ其十字架ニ釘スルノ外、何者カ爾ノ中ニ在ル

ヲ知ラズ』(コリンフ前書二ノ二)と言われたり。此言は聖使徒自ら唯神子の十字架の敎の外、他ゝ何事をも知るを欲せず、又他人ゝも傳ふることを望まぎと云ふゝ非ず、乃ち使徒の說敎の全力と、凡て人の知るべき所のことゝ、皆此眞理を中心とし、此眞理ゝ基原せられ、之より光明と救贖とを受くることを云ふゝあり。然れども說敎者若し此聖使徒の言を、唯文意の儘ゝ了解して說敎するのみゝてを、其說敎は眞實と神聖の精神を以て貫徹せられたるが故ゝ、聽衆ゝ對して善果を結び、大功を奏することゝ決して疑ふべからぎ、十字架の說敎の大勢力あるゝと既ゝ斯の如し。然れども是れ唯說敎が如何なる智識の區域ゝ屬し、如何なる問題ゝ關し、又如何なる人生の行爲ゝ說き及ぼすゝもせよ、必ぎハリストス敎の敎誨及精神を保有すべきことを示すものなれば、凡てハリストス敎の說敎は、皆此智識の中ゝハリストス敎全班の敎を含蓄せざるべからぎ、蓋しハリスト

ス教はイエスパリストスの人の救ふに於ける一の中心の定理より出でゝ又其定理ふ歸着すれば也。

第七十一章　說教ふ救贖的たるべき精神の乏しき外面上の徵証

說教の救贖的たるべき精神の乏しきは、特に左の場合ふ於て顯はるゝものとす。

(ア)說教者が主イエスの名を以て說教を成聖せず、且つ人の爲に善惡と論じつゝ、諸善の原因者及諸惡の凱戰者と忘るゝふ在り。教會文學の著者正しく此事を認めて曰く『吾人ハ說教ニ於テ重複スル所ノ言、即チ吾等ノ主イエスパリストト云フ一言ハ、時トシテハ其說教ニ非常ノ教化力ヲ與フルノ經驗アルコトヲ知ラザルベカラズ、否其與フルヲ知ル』(教會文學第二部)と。之ふ反して說教者若し「パリスティアニン」の爲ふ此最も

悅ぶべき名を忘るゝ時は、自らパリストス教の說教ふ於て最も緊要なる主眼を忘れたることを呈はし、且つ其說教は教化力の最要点を失したるとを表示するなり。

(カ)說教の問題を解釋するに當りて、專らパリストス教の信仰及生活の學問ふ關係なき至遠なるものふ注意し、却て此學問ふ至近なる者ふ對しては、毫も適當の査察なくして止む如き時ふ在り。例へば『天ハ神ノ光榮ヲ顯ハシ、穹蒼ハ其手ノ作ル所タリ』(詩篇十八ノ二)てふ聖言を說明するふ當り、說教者若し周視すべからざる萬有世界の事を論ずつゝ、徒らふ天体の區別、其距離の推算、其周圍重量等の測量を述べ、且つ聽衆に神の造物を觀察せしめて、其思想感情を造物主ふ高むることを勉めず、尙且聽衆の耳をして聖書證する所の造物の愁歎と希望ふ傾けしむることを欲せざりせば、聖書の說教とは唯虛名のみふして、其實教會說教の區域内ふ

屬せゞ、是れ蓋し其中ゝ救となるべき精神の存せざるが故也。

（サ）立證を要せざる所、即ち パリスト ス教の爲に神益なき證據を立つる時、又は場席を省慮せゞ、或は論癖の精神よりして攻擊をなす時ゝ在り。例へバ凡庸人に對して ゝ具さに神の存在、靈魂の不死、惡魔の存在等の眞理を證する必要なく、加之、小信若くは不虔敬ゝ由て生ゝたる疑團を述ぶるも亦要なき也。蓋し此等の場合ゝ於ては聽衆を教化するの代りに、却て未だ嘗て斯の如き害毒なる疑念を懷かざる聽衆の智慧と感情中に存する信仰の樸實及思想の潔白等を害すれバ也。されど說教者は若し事情の自ら止むとを得ずして不信及不虔の迷謬と戰ふ時ゝ、唯主イイスパリストスの名と能力とを以て戰はざるべからゞ、即ち福音の教と福音の信を以て此等を排擊すべきなり、而して若し他の證據或は他の說を用ゐる時ゝ、即ち補助の方法として用ふべきのみ。總て人類

の陷落と救贖、罪惡と恩寵、死と復活とは、是れ說教者が常ゝ不信の誘惑、壓抑ゝ對立せんが爲ゝ確定すべき所の要点なり、否らざれバ說教者自ら己を心靈上の攻擊より救脫し、又他人をも不虔の害毒より救ふこと能はざる也。

第七十二章　教會說教に教化力の精神を傳ふる方法

說教者が教化力の要領に違反せず、全く其說教を教化的ゝ述べんが爲に研究すべきものは左の如し。

（ア）聖書、信經、奉禮禮書、教會が正教の教として認定する所の神學書、及聖神父等の書、即ち特ゝ正教及教誨の摸範として顯ゝさるゝ所の教師輩の書なり。

（イ）啻ゝ此等の書を學ぶのみならゞ、乃ち其精神、殊ゝ新舊両約書の心髓を自得せざるべからず。蓋し正教の心髓なき時ゝ毫も教化すること能

いさるが故に、說敎者は宜しくハリストス正敎會の敎を知らざるべからず、然れども說敎に於て眞正の敎化力を與ふる爲には、學理的に正敎を宣ぶるのみを以て未た足れりとなさず、乃ち其心髓を述べさるべからず、即ち聖書及敎會の敎と一致して述ぶるのみならず、力めて聖書と敎會の敎ふるが如く述べつゝ、其說敎は凡て聖書の敎の特点を述ぶべし。されども是れ敎會說敎の首もなる本原及儀範を心靈的に酝味する に非れば能はず。吾人は社會上の生活に於て親密に已と接近する人々の語氣体裁に倣ひ易きが如く、學術文學上の境遇に於ても亦已が常に熟知せる著書、殊に吾人が愛する著者の書に因て已の言語を搆造するもの也、されば說敎者が其說敎を起稿するに際して、神に感せられ、或は神に照らされたる眞理の敎師輩の書を熟讀し、悉く其敎化的の說敎に摸倣して自已の說敎を組織する時は、能く其語氣體裁を自得するに至る。而して聖書を誦讀するに循ひ、益々其敎の性質に親炙して漸々知らず識らず其敎導者の思考せしが如く思考し、彼等の言ひしに等しく言ふが如き習慣を養成するに至らん。故に若し勉めて聖書を誦讀すると共に、力めて其敎に從て已の心靈的生活を涵養搆造するを以て、當然に神の敎會に奉事せんとする者の爲に必然なる本分たらざるべからざるとせば、眞正ハリストス敎の敎化力の精神を以て說敎を活動せしむる最善至良の方法は、聖書及敎會の敎を學ぶに若くものなし。

勸化力を論ず

第七十三章　勸化力の定義

勸化力とは聽衆をして其心意中に說敎者の敎ふる所のことを實行せしめ、及敎化的の說敎を以て聽衆に形成せる知識の概念思想承服に應じて、之を履行するの決心を起さしむるを云ふ。福アウグスティン曰く『勸

化トハ他ナシ、聽衆ヲシテ說敎者ノ約束スル所ノコトヲ守ラシメ、其威嚇スル所ノコトヲ恐レシメ、其譴責スル所ノコトヲ惡マシメ、其善シトスル所ノコトヲ愛セシメ、其哀ム所ヲ悲マシメ、其報ズル所ノ喜ヲ悅バシメ、其聽衆ノ眼前ニ述ブル所ノ共ニ哀ムベキヿヲ傷マシメ、其避クベキ所ノコトヲ避ケシムルガ如キ等ノコト也』(ハリストス敎の學術四ノ二十七)と。

第七十四章　說敎の勸化力の要件

說敎ハ神言の如く『人智ノ婉言ヲ以テセズ、乃チ靈ト能ノ顯示ヲ以テスル』(コリンフ前書二ノ四)時は、眞に聽衆を勸化することを得べし。是を以て聖書を勸化的に傳へんとは、可成的自己と聖神の悅びて賜ふ所の靈力を有せざるべからず。

說敎者の心意と靈力の顯はるゝハ(ア)他人の敎導者たる自己の高尙なる權を當然と認識するとイ)眞正の熱心を以て聽衆を善福と導くと、(ウ)

神靈的事業と他人を敎導する充分の經驗を有することを以てす。說敎の勸化力の要件、即ち說敎と於て顯はすべき所の聖職、父たる健忍、及深き信用の生出するも亦此よりす。

第七十五章　說敎と於ける聖職の定義

聖使徒パウェルハ牧民的說敎の課程をティートと授けて誡めたることあり、曰く、『爾宜シク此ヲ以テ之ニ言ヒ、之ニ勸ムベシ、且ツ諸權ヲ以テ衆ヲ責メ、人ノ爲ニ輕視セラルヽ勿レ』(ティート書ノ十五二)と。又使徒自らも深く己の使徒職と熱中せしことハ、數、其書札の諸處に散見する所なり、例へバコリンフ人と達する書中と『我ハ使徒ニ非ズヤ、我ハ我儕ノ主イエスハリストスヲ見シニ非ズヤ』(コリンフ前書九ノ一)と言はれたるが如き、是れ皆正當と立てられたる說敎者の傳ふる眞理の言の、聽衆と對して正當なる能力及權威を有することを云へるなり。此事と關して使徒又己の使徒職を辨

護せし個所に於て言ふて曰く、『我神ニ属スルノ熱心ヲ以テ、熱心爾等ガ爲ニス、我曾テ爾ヲ聘シテ一夫ニ與フルニ因リ、爾ヲ以テ童貞ノ女ノ如ク、ハリストスニ献與スベキヲ致ス、蛇昔已ノ詭詐ヲ以テエワヲ誘惑セシガ如ク、我爾ノ心敗壞シ、ハリストスノ樸實ヲ離ル、亦是ノ如キヲ懼ル』（コリンフ後書十一ノ二、三）と。又聖福音者は主イイスハリストスの敎と、其言の人民の上に能力ありしことを認めて曰く、『衆其敎ヲ奇トス、其言ノ權アルニ因ル』（ルカ四ノ卅二）と、即ち人民い主の言の權と共に、其言の自己に對して非常の能力ありしことを感じたる也。是に由て之を觀れば、牧者の言は聖使徒の言へるが如く、威なる命令を以てせざるべからず、即ち聖職と權威と有する精神を以て貫徹せずんばあるべからず、是れ其勸勉の聽衆に輕侮せられざらんが爲なり。されど牧者は其行と言に於て謙遜温柔なるべきい勿論にして牧者い衆（ハリスティアニン）よりも層

一層此に注意せざるべからず、蓋し謙遜温柔は決して說敎の聖なる威嚴の精神に反對するものに、あらず、即ち適宜の威嚴を保ちて講座より宣ぶるは、毫も誇り高ぶるにあらざれば也。說敎者は聽衆の前に於て己の不當なることと承認し得べし、否承認せざるべからず、されど何人の前に於ても常に已が眞理の役者たるの職、即ち神の補助者たるの職を卑下すべからず、何となれば此れ眞理の言と、吾人の救贖に於ける神の經綸とを害すれば也。說敎者は已を以て寶を入るる脆き器なることを忘るべからず、又此と同時に其脆き器に寶の入れあることを理會すべし、乃ち前者に就きては說敎者に己を以て誇るべからざることを記憶せしめ、後者に關しては神の賜を卑下すべからざることを記憶せしむる也。斯の如く謙遜は神の役者たるの職を害せざるのみならず、乃ち却て之を高め、之を成聖す、又聖なる威嚴い、牧者の謙遜を破らざるのみならず、

却て人と神とゝ對して其價値を高からしむ。故ゝ牧者は聖なる講座ゝり宣ぶる時は、預言者及ハリストスの使徒たる資格を有つべきのみならず、即ち神の名ゝ依り、ハリストスの權と聖神の力とを以て、責むべきを責め、禁ぜべきを禁ト、勸むべきを勸むべし、彼の無氣力なる僞教師輩が人の腐敗したる性ゝ媚び諂ひ、且つ其偏癖弊習ゝ反對して決行すべきを、故らに默するが如き者ゝ倣ふべからず。

第七十六章　說教中ゝ聖なる威嚴の足らざる徵証

勸化的ゝ說教せんにゝ必ずしも聖なる威嚴なかるべからず、然れども之が爲ゝ烈しき驚嚇嚴責或ゝ多少聽衆ゝ對する過度の譴責攻擊を以て其說教を充すべき謂れに非ず、斯の如き所爲あるは、却て此れ說教ゝ緊要なる威嚴を缺く第一の徵証にして、即ち說教ゝ勸化力の足らざる所以なり。概して權威能力なるものゝ、殊ゝ穩當なる所置動作を以て顯

ゝるゝものゝして、憤怒は常ゝ多少の無力を示すものなり。譴責、意見、禁制ゝ聽衆に對して大なる功力と奏するおとあり、然れども此れ喧騷暴怒を以て述ぶる時ゝあらず、乃ち審理判決の權を有する者が憤怒を以て述べざるのみならず或ゝ暗々裡ゝ、或は公然に、憂愁の感情を以て正當なる詰難宣告をなす時ゝ在り、故ゝ此譴責と語氣とは非常ゝ其譴責せらるゝ者の心意を感服せしめ、而して自ら矯正するの決心を起さしむ。吾人の主イイススハリストスの譴責は、其精神最も畏るべきものなれども、其中にゝ曾て憤怒の感情あらずして、無量なる憂愁の感情を包含したりき。

說教中ゝ聖なる威嚴及勸化力の足らざる第二の徵証は、聽衆に善事を勸め、若くは愧づべきことと避けしむる時ゝ當りて、說教者の怯懦なると、不決心なるとゝ在り、例へば、正義ゝして緊要なる譴責を視したる後

に不當なる説明をなし、又い人民の賞すべからざる動作慣習を叙述すると偕ゝ之が辨解等を下すが如きは、恰も説教者は聽衆の爲ゝ失儀者、視せられんことを危ぶみ、正義を説て却て聽衆を怒らしめんことを畏るゝ者なり。然れども説教者は自ら不正にして聖講座に於て正當の勇敢を畏るゝに由り、却て己の意思ゝ反して其危ぶむ所の事件に遭遇することあり。而して斯の如き説教者は其前ゝ人民の不滿足と嫌厭の幻象の現いるゝや、常ゝ公然聽衆を勸むることを畏れ、又勸告すべき人ゝ對して自ら急き隱るゝが故ゝ、其説教い到底聽衆を勸化すること能いざるなり。

若し眞理が聽衆をして憂へしむることあるも、説教者い何の危懼することかある、唯斯の如き時い專ら己の全力を盡し、其憂愁を轉じて悔改ゝ向はしめざるべからず、然る時い聖使徒と共に『我ガ喜ブヘ爾ノ憂ニ因

ルニ非ズ、乃チ爾憂ヲ以テ悔改ヲ致スニ因ル、蓋シ爾神ニ循テ憂フ、爾損ヲ我儕ニ受クル所アルヲ免ル』(コリンフ後書七ノ九)と云ふを得べし。説教者い自ら傲慢或い卑劣なる諂媚の精神ゝ因て其聽衆と眞理を侮慢せんことを恐れざるべからず。此れ聖書の役者たる説教者の全力を以て保守せざるべからざる説教の聖なる威嚴の精神ゝ反する大欠点なれバなり

(愛に説教の説教者の年齢分限と相應すべき事に就てハ、本書第四十一章(ろ)に於て陳述せる事項を參看すべし、而して彼處に於ては説教の問題ゝ關して陳述したれども此處ゝハ説教の精神と性質とに應用すべし)

第七十七章　説教に於ける牧者の健忍の定義

説教者は聽衆ゝ對し、常ゝハリストス教の愛の精神を以て説教の威嚴を有たざるべからず、此精神あるが爲ゝ其説教は愛あり敬虔ある所の父が子ゝ對する言となり、家主の家族ゝ對する語となるなり。説教ゝ於て最も頑固なる靈を忍ぶ所の父たる健忍の生ずることは之よりす、健

忍の個々の点は聖使徒が一般よハリストス教の愛を傳れるものと同一たり、其言よ曰く、『愛ハ乃チ寛忍、乃チ慈悲、愛ハ妬忌セズ云々』(コリンフ前書十三ノ四至八)と。若し説教中よ此寛忍あり、慈悲あり、又妬忌なく、貪ることなく、惡を念はずして、諸の義と善とを喜ぶ等の精神勝るあらば、仮令ひ其説教い聽衆の心意よ強力を有せざらんと欲するも能いざる也。聖使徒パウェルテモフェイと誡めたることあり、曰く、『爾宜シク道ヲ傳フベク、時ヲ得ルト時ヲ得ザルトヲ論ズル勿レ、皆宜ク專ラ之ヲ務メ、諸〻恒忍ト教誨トヲ以テシテ督責儆戒勸勉スベシ』(テモフェイ後書四ノ二)と。是を以て著名なる説教者い皆使徒の教誨と儀範とよ循て行へり。就中其健忍を以て秀てたるものは、殊よ聖金口の説教なり。

第七十八章　説教の健忍よ反する欠点

説教の健忍よ反する欠点は、德義的の苛酷主義(リゴリーズム)、德義的の冷淡主義(インデフェレンティーズム)是なり。

(い)苛酷主義の精神とは、宛も説教者が常よ聽衆の弱点を攻擊するを以て満足し、若くは大抵嚴責の語氣を以て宣ぶるが如き時よ於て顯はるいものとす、故よ勸勉よ於ける牧者の健忍の代りに執拗及嫌厭の精神を顯はすなり。此欠点は往々説教者の世の惡癖偏執と戰ふべき聖なる本分を誤解するより生ぜる所の通弊に由ることあれども、時としてい説教者自らの性質を顯いすことあり。此二者の中、後者い前者よ比すれば一層其不可なること明白なり、蓋し後者の場合に於て説教い容易く自己よ或苛酷を許容すれば也、然れども前者も亦大よ咎むべきものあり、蓋しハリストス教の福音の聖務に對する肝要なる注意熱心の足らざるい、聽衆をして説教者が講壇の上より人々の弱点を責むるを以て通

例のことと想いしめ、其勸説を以て毫も自己に關せざるものとなし、自己の生活と行爲に應用せざらしむれば也。

(ろ)德義上の冷淡主義は、聽衆を勸め、又聽衆に向ふことを欲せざるに起因す。此の如き主義を用ふる時は、説教者の説く所は、恰も聽衆に左の如く聞ゆる也、曰く、『我ハ爾ノ前ニ火ト水ヲ置キ、爾ノ手ヲ伸シテ欲スル所ヲ取ルニ任ス、爾ノ前ニ生命ト死アリ、爾ノ欲スル所、之ヲ爾ニ與ヘン』(シラフ十五、十六、十七)と。只だ智慧者が神の代理者として宣べし所の言は、僅に主の前に説教者を義とする也。主神は其誡命と辨明の中に水火及生死と吾人の前に置けり、而して其撰擇は縱ひ吾人の心意に放任するも、多方(説教も亦此中に在り)を以て吾人を生命に導き、死を避けしむることを止めざりき、且つ止めざる也、尚此事に關しては神自ら一預言者を以て悖逆なるイズライリ民に云はしめしが如し、曰く、『我終日手ヲ擧ゲ、頑逆ニシテ信

ゼザル民ニ向フ』(ロマ十ノ廿一)と。是に由て之を觀れば聽衆を勸むる熱心の乏しきは、勢説教の勸化力を害せざるを得ず、仮令ひ説教者は已の本分を行ひつゝ、人民の救の爲に緊要なるまことは、細大漏さず悉く之を傳へたりとするも、勸勉に於て心靈的熱心の乏しきが故に、福音の誡命に對する不注意より、無罪なり、潔白なりとして手を洗ふことを得ざるなり。

第七十九章　説教者が其宣ぶる所の教を確信するとの自然説教中に顯はるべきを論ず

説教中に顯はるべき確信(宣ぶる所のことを)は、全く説教者自ら其述ぶる所のことを承服すると、正當に其述ぶる所の事實を知るに在り。凡自ら承服する所の者能く人を感服せしむるは、最も著しき眞理なり。斯の如き場合に於て人を感せしむるは、啻に感服する者自ら其勸勉する所の趣意を明かに理會するのみならず、主として意識の德義的感化、

即ち希望及行爲の不定なる人の意識ゝ鞏固なる勸化力を以て作動する者なり。是を以て其敎誨の不正ゝして其作動の眞實ならざる者ゝても、己が實心を以て發奮されたる時は、他の己と同力なる者の勸化せしむること能はざる多衆と誘導することあり、此の如き現象ハ素より嘉すべきものゝ非ざれども、說敎者自ら感服する事は、明かゝ勸化力の一要因たることを證するゝ足る。是故に說敎者は將ゝ多衆をしてなさしめんとするとゝ、却て自ら眞實に向ふことなく、又他人をして避けしめんと欲する所のことを、自ら全意と以て惡まざる以上は、其言の聽衆の意識ゝ感化を與ふることを望む能ざる也。

又他の一方よりハ、總體に、陷落して更ゝ更生せられたる人性を熟知し、殊ゝ、聽衆の性質嗜好習慣を知らざるべからず、是れ聽衆を勸化するに好結果を奏せんが爲ゝして、實ゝ疑ふべからざるの眞理たり。如何なる

醫藥も治療すべき疾病ゝ對して之を施さざる時は、功效を奏するあと能はざるべく、又何人も己の名を聞かざる呼聲ゝ應ずる者あらざるべし、斯の如く說敎者も亦常ゝ某ハ如何なる勸告奬勵を要するやを知らざれば、竟に人を勸化すること能はず。聖使徒己のことを云ふて曰く、「衆ニ於テ我其衆ニ循ヒ、果シテ數人ヲ救フベキヲ致ス」(コリンフ前書九ノ廿二)と。敎會の聖師父等は具さに其當時の社會を熟知せり、故ゝ吾人ハ今他の材料ゝ因て之を求めんよりは彼等の說敎ゝ由て、尙能く當代人民の性質習慣を詳悉することを得べし。是を以て說敎者が凡て聽衆を勸化するゝ方りて大功を奏せんと欲せば、宜しく先づ其聽衆の如何を知るべき也。

第八十章　說敎者が傳ふる所の事ゝ對して說敎者自身の確信の足らざるより生ずる欠点

說敎者が傳ふる所の事ゝ對して欠くべからざる說敎者の確信の足ら

ざる時い、止むことを得ぜ表面的の勉勉に走りて、事實の正確なる識認の足らざるを補ふよ想像を以てし、心靈的經驗の足らざるを補ふよは表面的の思慮を以てする者なり。是よりして（い）所謂空言（聞き易く聽ハしけれども、活々たる意義思想感情なき語を集めたるものなり）（ろ）汎語（一問題よ就て一の抽象的の總念想像より取れるものにして、單よ他人の句調を眞似し、數々多くの事情と問題よ應用するとあるも、其中の一問題にも活用を有せざる所の叙述及證據を云ふ）なるものを生ぜ。第一の場合よ於ては、說教者若し自ら想像する所のおとを授くる手錬を有すれバ、往々想像の上に働くことを得べく、第二の場合よ於ては、說教者若し能く種々の思想を組織して之を叙述し、及問題の諸点を集めて之を顯はす所の鍛練を有すれバ、時よ或は聽衆の智慧を悅バしめ、又考慮を警醒せしむることを得べし。されども彼此両者の場合よ於ては共よ聽衆をして說教者が宣ぶる所のことを實行せしむると能いぜ、蓋し說教者自ら其問題の主眼と、聽衆の要求を認識せざるより其問題と聽衆と

を遠ざかるが如く、其說く所も亦實際的の問題よあらずして想像的の問題となり、面前よ立つ聽衆よ向ふよ非ぜして想像的の聽衆よ向ふが故よ、聽衆は恰も他事を聞くが如き感覺をなすなり。譬へバ想像に由り、或は風說よ由り、或は抽象的の総念よ因て描きたる說教中に存するものは、地上の虛無の繪畫のみ、富貴名譽權力等よ對する攻擊、肉身世俗魔鬼に對する言語上の開戰、又は無欲克己等を賞讃するが如きと是れなり。此よりして聽衆い此の如き問題の說教より勉勉を受くるの代りよ妄信を受くるよ至る、然れども此等の問題は自から重要にして、申さバ單よハリストス教の說教に属するものとす。以上陳述したるが如く汎語より成立する所の說教い、啻に功益なきのみならず、大よ聽衆と害し、或い多少說教者をも害するものも。

第八十一章　說教よ勸化力を傳ふるの方法

説教ニ勸化力を傳ふるの方法は、説教者の靈中ニ、他人を勸化するニ緊要なる力を形成する所の誘因より成立す。此誘因二種あり、其一ハ心意を知るの實驗ニして、即ち一般に人々と親密交際をなし、特ニ被牧者ニ親交すると、學術的及實踐的智識の幇助とを以て達し得らるゝものとす、他の一は説教者が自己の本分及價値を自認するの度ニ應ト て開發する德義上の点ニ屬するが故ニ、智識ニ關するハと極めて稀なりとす。されバ説教者ハ能く其説教の大効果と奏せんと欲せバ、宜しく先つ人を知ることを研究すべき也。

(い)説教者ニして克く人を知らんと欲せハ、必ず先づ、聖書に向ハざるべからず、蓋し聖書中ニは、最も正確に人の本然の價値と、其深く腐敗した る事實を明記しあれバ也。「吾人ハ如何ナル者ニモアレ、各個人ニハ聖書中ニアル吾人ノ模型ト吾人トノ間ニ正確ニ類似セル內部ノ亡ビザル

証明アルヲ見ル、此證明ハ吾人ノ良心、(神を畏るるに助くるの心)即チ內部ノ人ナリ、內部ノ人ハ全ク聖書ト一致スルモノニシテ、聖書ノ褒貶ズル所ノ事實ハ良心モ亦同ジク之ヲ褒貶シ、聖書ニ斯クアルベシト云ヘバ、吾人ノ良心モ亦斯クアルベシト云フ、然スベカラズト言ヘバ、然スベカラズト言フ』(教會文學第二部)是故ニ聖書は靈を知る第一の要因たり。之ニ次て至要なる指導を諸神父の書、殊ニ苦行者等の書とす。又最良なる組織の人性學、心理學を研究するは、不要のことニ非るのみならず、常ニ利益ある者なり。總ト て此等の指導ニ依る所の凡ての實驗ハ、説教者の爲ニ最も尊き價値あるものニして其教會聖書の教ニ依れる經驗は、大ニ實際ニ利用することを得べし。

(ろ)加之説教者ハ心靈的牧者の資格ニ於て『凡ソ其管下ノ信者ヲ觀察シテ其諸ノ狀態ヲ熟知スルコトヲ得ルハ、恰モ掌中ノ帳簿ヲ見ルガ如ク、

某ハ如何ニ神恩ニ健立スルヤ、或ハ罪ニテ傷ミ居ルヤ、如何ナル罪ニテ、如何ニ久シク煩ヒ居ルヤ、如何ニ危篤ノ疾病ナルヤ、如何ナル醫術ヲ要スベキヤヲ知ルコトヲ得、且ツ知ラザル可ラス（司祭の本分）

（は心意を知るべき要因は、痛悔機密なりとす、是れ獨り心靈的牧者よのみ達し得らるゝ方法にして、此外他よ吾人の秘密なる人を知るべき最も便利よして且つ信用すべき方法を發見するを要せず、唯說敎者は可成的大なる注意と怜悧なる觀察とを以て此方法を利用せざるべからず、斯の如くなれば說敎者は即ち心靈上の實驗よ於て欲くる所なかるべし。

活動力即ち傳膏を論ぜ

第八十二章　活動力の定義

活動力とは、天上の幸福よ於ける希望及預覺を以て聽衆に「ハリスティアニン」の心を煖むる所の聖なる感覺を惹き起さしむるを云ふ。說敎の活動力は聽衆をしてハリストス敎の恩寵を感せしめ、ハリストス敎の眞理と約束を以て聽衆を歡樂せしめ、及永生の渴望と慰籍を生せしむる時よ在り。

第八十三章　活動力の個々の定義

活動力は說敎よ傳膏すると同一なり。傳膏とは、總て人が神より恩寵を受くる事、即ち人に聖神の恩賜を傳ふることを意味す、此意義よ於て傳膏はハリストス敎、即ち恩寵の更新と同一般よして、聖使徒イオアンが衆信者に對して『爾等己ニ膏ヲ聖主ニ受ク』（イオアン第一書二ノ廿）と云へるが如く、各「ハリスティアニン」よ屬するものとす。之を細言すれバ、傳膏はハリストス敎會の特別なる業務、即ち預言職、使徒職、帝王の權、聖務者等の爲よ特別なる恩寵の賜を傳達するおと也。尙之を詳言すれバ、傳膏は恩寵を受

けたる者の靈よ、威嚴及能力の、溫柔及愛と混同して顯いるゝ所の格段なる傾向なり、此れ福音者が吾人の贖罪主よ關して云いれたるが如し、其言よ曰く、『視ヨ我カ選ブ所ノ僕、我ノ愛スル所、我ガ心ニ悅ブ者ナリ、我將ニ我言ヲ以テ之ニ賦セントス、而シテ彼必ズ律法ヲ以テ異邦人ニ示サン、其競ハズ、喧カラズ、其聲ヲ衢ニ聞カズ、己ニ傷メルノ葦其レ之ヲ折ラズ、燃余ノ炷其レ之ヲ熄サズ、律法ヲ興シテ以テ勝ヲ致スヲ待ツ』（マトフエイ十二ノ十八至二十）と。是故よ聖書の傳膏も亦、總て神より人よ啓示せられたる教の神出なるを云ふ也、之を細說すれば神、聖神（シン）より格別非常の照耀を受けたる人々の記せる書の感神的なると也。尙之を詳言すれい、感神的の言の中よある云ふべからざる非常の興味なり、即ち一預言者は之よ感じつゝ『爾ノ言ハ我ガ喉ニ於テ幾何カ甘キ、我カ口ニハ蜜ヨリモ甘シ』（聖詠第百十八ノ百三）と叫喚せるは、是れ此ことなり。或は此言の狹義よ於ては嘗

てナザレトの會堂よ集まれる人々が『其口出ス所ノ嘉言ヲ奇トス』（ルカ四ノ二十二）と言ひて、イエスハリストスの教よ就きて證せるが如く恩寵のよと也。此最後の意義よ於て傳膏は常よ同一の敬虔なる說教よも同一よ存在せざる所の特殊、且つ最も高價なる点を成立す。是よ依て之を觀れば、說教は傳膏の精神の關係する時、即ち說教よ於て聖書の甘味と、恩寵を傳達し得る時のみ、活動的の說教たることを得るなり。

第八十四章　傳膏せられたる說教の要点

神言の甘味と恩寵とは果して何處よ在るや。此れ救主自らナザレトの會堂よ於て、預言者イサイヤの書の一所を通讀して、之を自己よ應用されたる時、吾人に示されたり、其言よ曰く、『主ノ靈我ニ臨ム、其我ニ膏スルニ緣テ福音ヲ貧者ニ傳ヘシメ、我ヲシテ心ヲ傷メル者ヲ醫シ、擄者ニ釋ヲ得、瞽者ニ見ルヲ得、瘡疾者ニ自由ヲ得ンコトヲ告ゲ、以テ主ノ禧年ヲ

宣ベシム』(ルカ四ノ十八、十九)と。縱令爰ニは唯イエスハリストスの傳道の趣意のみを示せるが如しと雖ども、然れども此中ニは又其恩寵的說敎の精神、即ち愚者の心を開き、傷めるの心を活動せしむる所の天恩の精神あるとをも表明したるなり。故ニ自己の敎師輩より多少律法の冷淡嚴格なる談話を聞き慣れたる人民ハ、不意ニ主の新傳道の非常なる愉快を感ドて、之ニ恩寵の特稱を與へたり。然れども福音の恩寵の精神ハ嚴格と義判を排除せざるのみならず、常ニ多少此等と合せり、蓋し傳膏せられたる說敎ニ於ては感神の聖詠者の言の如く、吾人の救の經綸と均しく『慈憐ト眞實ト相交リ、義ト平和ト相接吻スレバナリ』(聖詠第八十一ノ十)。是ニ於りして傳膏せられたる說敎の殊なる所は、感動及痛感の二点なり

第八十五章　感動の定義

說敎の感動ハ、說敎中ニ眞實(義を求むるの眞實)と慈憐(非常の不義者をも寛容するの心なり)と和合

するより生ず。蓋しハリストス敎ハ永遠の眞理と、及神の罪人ニ於ける無量なる仁慈の働きを啓示するが故に、其凡ての敎、即ち嘗て神が陷落せし祖先ニ與へたる前約より吾人の贖罪ニ關する十字架の敎——十字架の敎より自力を以ては如何なる報酬をも得ること能はざる神國の繼續者ニ對する祝福の言——永遠の光榮と福樂とを以て賞せらるる者ニ對する祝福の言ニ至る迄、悉く皆云ふべからざるの感動を以て呼吸すれバ也。是ニ依て感動の精神は、膏せられたる凡ての說敎中ニ固有のものとなりて、活動力の首もなる一元素を成立す。人を自ら温和ニして深く熟考し、及全心全意を以て神旨ニ循ふの感情に導くは此感動ニよして、之に因りて吾人は自己を微弱なる者なり罪人なりと承認し、而して說敎中ニ主自らの外、何者をも覓むるとなく、且つ衷心より聖詠者の如く『天ニ在テハ誰カ我ガ爲ニス、地ニ在テ爾ト偕ニセバ別ニ願フ所

ナシ、我ガ體ト我ガ心ハ弱レリ、神ハ我ガ心ノ固ナリ、世々我ガ分ナリ』（聖詠第七十三ノ廿五、廿六）と云はん。然れども說敎の感動は、往々畏るべき兇言（おそし）に移ることあり、乃ち斯の如きことは唯如何に勸說するも、尙剛愎にして己の罪惡を悔改めさる靈と遭遇する場合に在るものとす。

第八十六章　痛感の定義

痛感は感動と分離すべからざるものにして、說敎中に功德を求むるの義と、『神人間ノ一ナル中保者、即チ人ナルイイススハリストス』（テモテフエイ前書二ノ五）の功德に依り、價なくして賜はる所の和平の精神の合するより生ずるものの也。痛感は人心に聖なる悲哀を生ず、されども此悲哀は神に由るの悲哀と神に對するの慰藉とを滲合する者なれば、徒らに人々の心を柔弱ならしむる者にあらずして、却て之を養成活動するもの也。此の如き狀態は「ハリスティアニン」が其全生命を神に捧獻するに先たち「ハリスティアニン」に於て自から之を得有せり。故に「ハリスティアニン」に傳膏せられたる者として其靈中に憐憫と神の「ハリスティアニン」に對する無限なる愛の印記と聘質とを以て勝りたる者なり、然れども此時「ハリスティアニン」は嘗て自己の種々の犯罪を以て彼等を愛憐する所の神を怒らしめたることを忘るべからず。此狀態の完全なる儀範は、吾人の贖罪者たる主い既に自ら一の罪過だも無かりしかど、天父の義と慈憐とを得るが爲に人性を受けたると同時に人の分與をも受けて以て之を顯はせり。聖傳に因るに、主は常に涕泣したることありと雖ども、曾て笑ひたることなかりしと云ふ。實に傳膏せられたる說敎の痛感は、何の處に於ても自から聖なる悲哀を以て貫徹せられ、且つ屢々祈禱の聲を神に捧ぐる所の靈の意向に生ぜるもの也。然れども傳膏せられたる說敎の痛感い往々靈に於て非常に壯嚴なる者たるを害せず、此の如き時い此說敎い

神に對する清朗端嚴なる讃美歌となるなり、(蓋し是れ神の特別なる恩寵を記憶して讃頌する時に在るものとす)、時としては之と反對に驚くべき悲哀の感情を顯ハそことあり、此時に方りては、獨り人類のみならず、萬物も亦皆號哭するが如き觀を呈す、總て此等の痛感ハ神の重き試誘と懲罰の時に於て特に然りとす。されども此際自己の柔弱なるおとを認め、且つ神に於ける福なる慰藉を失はざる靈と心に對する此働の首要なる性質は、常に同一なる者として止まるなり。

第八十七章　傳膏に不適當なる說教の性質

傳膏せられたる說教の性質は、之を詳細に理會せんよりは寧ろ感ぜるもの也。此傳膏に就ての定義を組織するに務むるものハ、其固有の点よりは、寧ろ傳膏に反對なる性質なりとす。されども此れ傳膏せられたる說教が其性質の消極的たらんことを云ふにあらず、却て其積極的の性

質なり、即ち香、色、味等が萬物の積極的性質を組織するが如し。傳膏に全く不適當なる說教の性質を示すは最も困難なり、若し強て之を示し得るとすれバ約ね左の如き標準を示すを得ん。

(い)頓智なり。頓智ハ證據の材料を得、及應用の配置をおすの敏捷なると、思想及言語の諧調なると、反對なることを親近し、及其他の之に類する言語の機智を成立するおとハを以て大に智慧を快然たらしむるものなり。然れども頓智ハ吾人の心意の上に及ぼす說教の善良なる感覺を助けざるのみならず、時としては全く之を害するおとあり、蓋し此の如きおとは其由る所の些細なるよりも拘らず、自己に反射する所の性情及傳膏せられたる說教が聽衆に生ずる所の性情と一致せざる靈の傾向を顯はせバ也。是に依て天性機敏なる說教者が己の聖なる業務に對して非常の敬虔と牧者たるの熱心とを有する時も、尙或は此恩賜を受け

ざるとありとするも、靈に於て幸なる教師輩の言の質朴なる說教中に聞く所の能辨に若かざる也。而して傳膏の精神に富める說教中には、往々諷刺の性質を交ふるおとわれども、此諷刺は人民の迷謬に就きて、常に敦厚にして交たる者の深き哀を已の下に藏す、即ち說教者い已の感情の柔和にして、其力の非常に聰明なるが故に、直接に攻擊するを欲せゞして、或比喩的を以て之を隱蔽するなり。

(ろ)過嚴なる分析法なり。『傳膏せられたる說教中にあるハリストス教の信と善行に關する所の思想感情及眞理の深奥なり。又心靈的開發の意義に於て理會せらるゝ傳膏を以て、傳膏者の名を自得したる教會の教師輩に歸する時い、則ち此教師輩が實に心靈的の事實を洞視したるおとを發見せん。蓋し彼等い已に萬事を知り、自ら之を經驗したるが如く諸の事實を語れば也。例へゞ聖金口のパワェルの書札の講明を見る時い、

吾人をして彼が恰も使徒と面談するが如く感覺せしむ。シリヤのエフレムが陷落したる人性を痛嘆して悔改に喚起する時い、自ら陷落の深淵に墮落して諸事を觀察したるが如く想いしむ、又聖大マカリイが恩寵の靈に於けるの効力、及心靈界の現象を論ぜる時い、恰も自ら萬事を視て之を識れるが如くなりき』(教會文學第二部)。然れども是れ一に心靈的觀念の深遠なるに因るものにして、評論の分析法には非る也。尤も分析法を亦說教に甚た適當にして、且つ利益ありと雖ども、是れ唯誘因の下に於てす、即ち其分析法の程度を有し、問題に就て正當に知らざるべからざることに敷衍し、而して細微に涉らざる時のみとす、されば之と反對なる場合に於ては、分析法は分裂したる者を合同するの能力を有せゞして、却て唯問題を分裂せしむるに過ぎゞ。概して能辯的の智慧い、傳膏せられたる說教に裨益なきもの也。

（は）甚たしき定理的の語氣、痛く壓縮したる叙述及洒落なる言語なり。蓋し傳膏せられたる說教中よは、常に衷情の聞ゆるものよして、即ち聖書に言へるが如く此說教は『心ヨリスルノ言、及心中ニ在ルノ言ナリ』（創世記三十四ノ三、士師記十九ノ三、ルフ記二ノ十三及其他）。故よ甚たしき定理的の語氣及痛く壓縮したる叙述中よ多少免れざる乾燥い、傳膏せられたる說教中よ結合するよとなし。又全く福音の精神を以て貫徹せられたる傳膏の說教は、其表面上至て聖書の言語よ近似する者とす。されバ約ね說教中よ此世の風致の勝れるは、即ち其中に傳膏精神の乏しきことを證するなり。

第八十八章　說教よ傳膏の精神を傳ふる方法

傳膏せられたる說教を活動するよと、如何よ何を以て活動すべきやの疑問よ對して、正當の解釋を下すい容易のことよあらず、果して之を困難なりとせい、活動的に說教するよとを學習するの困難なるは固より

比較すべくもあらぜ、否之を正言すれバ、說教よ活動力、即ち傳膏を傳ふる學術的の方法も亦之れあらざるなり。傳膏の惟一の本原い更新及恩寵の精神なり。是故に傳膏は天然以上の神恩にして、且つ「ハリスティアニン」よも遠ざかる者よあらぜ。是を以て說教の傳膏を求むる者は、宜しく自己の靈よ傳膏を保存して、之を熾にすべし。

第四分類

教會說教の叙述法即ち外部の特性を論ず

第八十九章　說教を叙述するに緊要なる性質

今牧者の說教を以て文學上の文章とすれば、即ち是れ普通文學の一科たり。故に開發したる組織法の一般の性質は、亦說教を叙述する所の性質たらざるべからず。然れども此場合に於て說教者の注意顧慮すべき所のものは、自然左の三性質なりとす。第一明瞭、第二品格、第三雅致是なり。說教は人民に對する說教としては、特別の明瞭を以て殊なり、心靈的牧者の說教としては特別の品格を以て殊なり、且つ其固有の美と雅致とに遠ざかるべからず。

說教の外部の三性質は、其內部の性質たる三要点、即ち教化力、勸化力、及ひ活動力に適合せざれば此れ說教者が唯明瞭に教誨し、品格を備へて勸勉し、及能辯を以て聽衆の心上に作動せんと欲する時のみ述ぶべきものといふまでもなく、乃ち其內部の性質の互に適當するが如く、外部の性質も亦常に適當せんことを要するなり、故を以て說教に於ける此等の特性は分つと能はず、否分つべからざるものとす。

第一

第九十章　說教の明瞭に關する一般の定義及此定義を聖堂說教に應用するを論ず

叙述の明瞭と理會し且つ確定するは一にして足らず、叙述の明瞭とは、第一、吾人が述ぶる所の言語の互の一致、及言語が其言語を以て顯はさるゝ意義と一致することにして、之を無上明瞭と云ふ、第二は聽衆の多數に準ず、說教をして平易ならしむることにして、之を尋常明瞭と云ふ、第三

は凡て說敎に於て叙述せらるゝことを、通常の讀者若くは聽衆ゝ會得せしむべき叙述の明瞭ゝして、之と普通明瞭と云ふ。此等ゝ皆說敎ゝ於て、一も欠くべからざる者なりと雖ども、唯各樣なる誘因、各樣なる程度、及各樣なる關係に隨伴せんことを要す。

第九十一章　叙述の無上明瞭に關する定義

叙述の無上明瞭ゝ、言語の正確簡潔ゝして、且ツ適切なるゝ在り。凡そ說敎者が其聽衆の如何ゝ係ゝらず、明瞭ゝ自己の問題を述ぶるは、專ら左の場合ゝ在りとす。

(い)熟語、表言の用方能く其規律ゝ適合しつゝ、總トて言語の精神、即ち殊ゝ作文學ゝ規約せる言論の法式を守る時、

(ろ)自己の生國語、即ち兎ゝ角社會一般に使用する便利なる言語表言を用ふる時、

(は)或定義及思想を發表するゝ方りて、之と全く適當したる言語及文句を使用する時なり。

第九十二章　無上明瞭の價値

無上明瞭ゝ、凡そ言論家たる者の言語中ゝ有せざるべからざるものとす。されど此要求ゝ或說敎の特別なる趣意、若くゝ其目的の如何に由り常ゝ諸種の例外を以て制限せらる。抑々亦無上明瞭の說敎に於て、如何ゝして正當ゝ使用することを除くべからざるものゝ左の如し。

(い)聖書の言語及全表言を使用する事。

(ろ)聖敎の意義及眞理を發表する所の格別なる熟語を使用する事。

凡そ此等のことゝ、當ゝ之を除却すべからざるのみならず、乃ち叙述法の特別なる品格を成立するものなり。蓋し其引証中ゝ、或言語ゝして充分聽衆ゝ理會し難きことあるも、能く其說敎に適應し、且つ緊要なる時は、斯の如き熟語の表言を其儘使用して之が解釋を與ふべく、苟も他の言語斡旋(イロマハシ)を以て之を換ふべからず。

第九十三章　尋常明瞭ニ關スル定義

凡そ極めて平易且ツ解釋を須たずして自然明瞭なることも、未た其事を知らざる聽衆の爲ニは、全く分明ならざることあるものなれバ、說敎者は宜しく聽衆の多數ニ應じ、力めて卑近平易の言語を用ひざるべからず。而して之が一般の方法ハ、學術的叙述の樣式を用ふるの代ニ會話的の樣式を以て之を述ぶるニ在り。凡そ學術ハ諸の事物を合同總括することを務むるものなり、これ後に單一物より複雜物を抽出し、及一般のものを以て個々のものを解明せんが爲なり。故ニ學術的言語ハ多少抽象的なり、壓縮的なり。之を學術的言語の本色とす、然れども唯學術の範圍ニ於てハ、世人の理會すると否とニ係はらず、學術固有の表言を以て思想を言ひ顯ハすもの也。之に反して會話的の言語ハ、多少抽象的と壓縮的とニ遠ざかる者なれバ、說敎者自ら會話の問題を觀察熟思するニ非ず、只或人の要求ニ由て觀察熟思するなり、會話ニ於てハ、說敎者ハ自己の前ニ問題のみを見るニ非ずして、今彼が何人ニ向て講說するかを見るが故ニ、說敎者は其問題ニつきて他人の知らんと欲する所のことを述べ、及他人の理解し得べく述ぶるなり。是れ會話的說敎の具体的（コンクレトノスチ）、即ち顯明若くハ摸像的、及說敎の果實多きと若くハ描寫的を以て殊なる所以なり。譬へバ『人ノ眞正ノ幸福ハ、首モニ良心ノ潔白ナルニ在リ』といふ文句ハ、此れ學術的の用言なれども、充分學術的の幹旋（イヒヤ）ニ慣れざる者ニ對する通常の談話に於て此の如く談話するニと亟と罕なり。今之を會話ニ於て一層摸像的に、一層果實多く顯ハさバ、幸福なる人とハ、巨萬の富を有し、萬事に飽足し、高位顯官に居る人を云ふニ非ず、乃ち靈ニ如何なる罪もなく、其良心ハ如何なる刺戟等を以て苦まざる人を云ふとならん。斯の如き有樣に於て宜ぶる時ハ、其說敎の極めて該博ニして、且

つ了解し易きは明々瞭々たり、又是より生ずる尋常明瞭の首要なる性質及規約い、即ち言語の摸像的及描寫的なりとす。

第九十四章　尋常明瞭の緊要なるを論ぜ

説教者は無上明瞭を以て滿足すること甚た稀なり、如何となれば説教者は約ね解を須たゞして明瞭なる言語を、能く理會し得る所の教育ある人々ゑのみ向て述ぶるとの至て稀なるゑ由る、されば説教者い宜しく常ゑ其叙述の平易ならんとを慮るべし。

第九十五章　尋常明瞭ゑ叙述し得るを論ず

學術的の定法に於てい、抽豫的の概念を配合せざれば、以て固立するゑと能はざるが如く、説教ゑ於ても亦抽象的の概念なくして固立すること能いざるや論を待たゞ。蓋説教い或問題ゑ關しては、完備の文章、若くい論議たるを以て、其或意味ゑ於ては學術ゑ外ならず、故ゑ説教も亦復

雜なるものと單一ゑ総括し、或い總合せるものと個々に分解すれども、實際説教ゑ於ては可成抽象的を摸像的に顯はし、又或場合ゑ於ていい、通常實用に應する言語の範圍内と、通常の幹旋より取れる同義的の釋義及文句を顯はすもの也。時としていい學術的の叙述法も亦成るべく平易を務むるとあり、即ち數多の聽衆に、或學術と授けんと欲する場合ゑ於ては、學術上ゑ於て使用する言語のみを用ひ得ざることあり。斯の如き叙述法を槩して通俗的叙述法と云ふ。此叙述法は、特ゑ説教問題を述ぶる時に於て肝要なりとす、蓋し聖教の眞理い悉く高尚深遠なれども、積極的の眞理なるが故ゑ、之を言ひ顯はすゑ際しては、故らゑ通常の言語を用ふるの至て便利なるに由る。古代教會の教師輩揚言して曰く、ハリストス教の小兒輩の神を知ると、尚異教の智者ゑ勝ると、蓋し各人がハリストス教の首要なる眞理を信ずることの容易なるや斯の如し。況や

信仰を以て悟るゝ困難ならざるとは、之を信ぜしむるが爲ゝ、平易に述ぶることの一層容易なるに於てをや。福アウグスティン曰く、『問題ノ性格ニ於テ理會サレザル者ト、或ハ稍々之ヲ理會シ得ルモノトアリ、然レドモ其理會シ得ル所モ、已ノ教師ガ最モ明晰ナル言語ヲ以テ述ブルモ、尚表面的ニ理會スルニ過ギズ』と。彼又附言して曰く、『斯ノ如キ問題ハ全ク人民ノ前ニ述ブベカラズ、若シ之ヲ述ブルヿアラバ、或必要ナル場合ニ於テ、甚ダ稀ニ之ヲ述ブベシ。斯ノ如キ眞理ハ、一已人トノ對話ノ時ニ於テ說明スルヲ最モ可ナリトス』(ハリストス教の學術四ノ二十三)。

第九十六章　尋常明瞭に叙述するゝ方りて避くべき極端

尋常明瞭は、啻ゝ平易なる言語を用ゐるのみならず、又意義深重にして成るべく簡潔なる言語を用ふべからずと云ふゝもあらず。夫れ尋常明瞭とは、表面的ゝ述ぶることゝあらず、聖福音の如き、其言辭極めて平易

なるゝを拘らず、其神出なる意義の高尚深遠なると果して如何ぞや。又聖神父等は、大抵皆常ゝ平易の言語を以て說教せり、然れども誰か敢て彼等は表面的ゝ述べたりと云ふ者あらんや、否啻ゝ之なきのみならず、舉世皆教會と共ゝ、彼等を認定して、神の感應を得たる著者ゝ次ぎて恩寵の知識及心靈的智慧と有する第一の器となせり。又尋常明瞭い徒らゝ辨と費して叙述する謂ゝもあらず。夫の古代教會に於て有名なる教師輩の說教い、其言辭ゝ富みたると同時ゝ、思想と感情とゝ富めるは、讀者の知れるが如し。されバ吾人は唯必要なることのみと說明し、而して故らに各種の斡旋を以て言語を弄する一の滿足心より同意義の言辭若くは表言を集むべからず。

第九十七章　普通明瞭の定義

凡て叙述の平易と稱するは、比較的の事のみ、故に或人の爲ゝ容易なり

とするも、他の人の爲にハ困難なることあり、例令バ『言語ハ思想ノ發表ナリ』といふ言ハ、其文句至て平易ゝして、且つ普通の言語なれども、何人も明かゝ了解するの言なりとは云ひ難し、學問の教育なく、學術的言語の斡旋を知らざる人々は、恐らく之を理會すること難かるべし。是を以て成るべく何人も理會し、教育なき人も理會する所の言語斡旋を用ゐ、開化語ゝ通俗語を調和して開明社會の會話を平易にせんことを要す、此れ斯の如くして以て說教を普通明瞭の段階ゝ誘導せんが爲なり。

第九十八章　普通明瞭の肝要なるを論ぜ

凡庸人及概して學術の教育なき聽衆ゝ向て說教する時ハ、叙述の明瞭なると、理會し易きことの要求とは、屢々說教者に於て法則となさゝるべからぜ、縱ひ說教者が其職務ゝ對する熱心ゝ於ても亦其智識に於ても、自己の責任を成し遂ぐるに潔白且つ聖ゝして、毫も欠くる所なきにもせよ、其叙述の不明瞭なるゝ於ては、其教誨、勤勞勉勵は大抵畫餅に屬するなり。されバ普通明瞭ゝ述ぶるゝと能はざるは外面上僅かゝ一小欠点の如しと雖ども、說教者の聖務の進歩を妨害すること少々にあらぜ、苦し之を等閑ゝ附し去る時は、其初めや說教者と聽衆の間に介した る薄弱の屏障も、終ゝは鞏固なる城壁を構造して、說教者が豫め望みたる成功、及ひ將に果さんとする活働をして、竟ゝ意の如くならざらしむるゝ至らん。

第九十九章　通俗語を以て普通明瞭の要求を成遂ぐるの差支なきを論ぜ

說教ゝ通俗語を交ふるを以て(ア)不適當(イ)不都合なりとするは、正しきとゝハ非るべし、否な決して不適當不都合なることなし、蓋し說教中ゝ許すべからざる不正のことは、唯「ハリスティアニン」の敬虔なる感情及良

風を障害するまとのみなればなり、然れども、正當なる辨別力と理會力とを以て之をなす限りに於ては、說敎中に通俗の言辭及斡旋を用ゐたりとて、「ハリスティアニン」の感情及良風を障害するものゝ非ず。通俗語の中より、野鄙卑近なる語多しと雖ども、開發したる文學上の言辭中よりも亦之を發見すること少しとせず、此れ宜しく應に避くべきの弊害たるを免れぬと雖ども、此弊害を脫せぬとて、通俗語全班と蔑視するゝ、不法なる偏執にして、尙社會の惡人を見て社會全般を蔑視するの不正なると同一般なり。又說敎に若干若しくは許多の通俗語を用ゐたりとて不都合なりとは思はれぬ、否な、之を學び、之を用ふるゝ却て說敎者の爲に大なる益ありとす。通俗語の中にゝ、强勢なる表言、勇敢にして快活なる短言を以て秀でたる斡旋、敦厚にして且つ非常に慇懃なる語氣あり。而して言語の明瞭に就き通俗語の最も緊要なるゝ、思想に定義を與ふるに

摸造的にして最も適切なることなり、故を以て通俗語ゝ曾に通常人民の爲のみならぬ、凡ての講說、殊に敏辨學上の講說に用ひて大結果を奏することを得。而して說敎者が通俗語を使用し得る所の好適例は聖書中に在り、之を尙正しく言へば、俗辭ゝ獨り聖書の原語を知れる學者のみならず、凡そ敎育ある者、及注意して聖書を誦讀する者には、聖書の許多の個所に於て發見せらるゝなり。殊に言語の華美なるを以て殊なりたる預言書の中、預言者イサイヤの書ゝ、最も能辨的の書として數へらるゝものなれども、聖預言者自ら己の事を言ふて、新しき卷紙を取り、之に人の筆にて書するの命令を神より受けたりと云へり、之を解釋する者の言に依るに、人の筆にて書するとゝ、此れ通俗語を以て記することを謂ふなり。聖預言者イエゼキイリの書中にゝ、許多の俚諺あるを見るなり（全書十八章を看よ）。ソロモンの箴言及シラフの子イイススの智慧書中にゝ、許多

の俗語の格言を含有するや疑なし。福音及使徒の書札よ於ても亦平易なる俗語の表言を發見すること少なからぞ。且つ有名なる辨論家の學校より出てたる教會の聖神父等が人民に向ふや、約ね學校の言語を用ひず、故らよ俗語を以て述べしと歴々として証すべし、就中聖金口の説教の俗辞多きは諸人の普く知る所なり。

第一百章　説教中に通俗語と用ふるよ由て生ずる極端を預戒すべきを論ぞ

凡そ萬事よ極端あるい、勢の免れざるが如く、説教よ通俗語を用ふるよ就ても亦極端あるを免れず。一方よい、通俗語を以て無學若しくい惡趣の徴証として之を危ぶみ、爲よ全く通俗語を避くる者あれば、他の一方よい、力めて通俗語よ摸擬し、其機會を得ると機會を得ざるとに論なく、唯通俗語の組立を以て説話せんとを欲し、尚は且つ何等の必要あるよ

非ぞ、人民の話方と外飾的保存の爲よ、開化語の正當なる要求を辞する者あり。此等よ就て認むべきことは左の如し、

(い)時としては徹頭徹尾純乎たる通俗語を以て説教することぞ得、但し之を使用するよは、最も完備適當ならんとを要す。然れども、是れ甚だ困難なるとよして、俗語のみならず、總ト て生國語よも亦特別の經驗を有し、且つ之を熟知せんことを要す。抑、書籍よ依て知り得たる通俗語は、大抵説教よ不都合なりとす、是れ蓋し一方よりは、其俗語の應用を知らざると、又他の一方よりは、組立の過剰よ一樣なるい、能く通俗語を知らざるよ因するものよして、啻よ人民の口頭の言語を熟知せざるのみならぞ、未た能く通俗語の書類をさへ知らざるが爲なり。總ト て説教よ於て文學上の言語のみを用ひて充分利益すること能はずんい、焉ぞ通俗語のみを用ひて充分なる利益を得べき理由を發見すべけんや。之を要す

るに說教に使用する言辭の完備にして其極端と避けんには、須く適宜に俗語と開化語とを混合するに在り、是れ吾人は通俗語を以て利益しつゝ、人民に開化語を敎へんが爲なり。

(ろ)時としては一般に理會し易からんことを欲するが爲に、人民の談話するが如へ云ひつゝ、文法上の或要求より遠ざかることあり、福アウグスティン認めて曰く『明瞭ニ注意スルノ傾向ハ、能ク聞ユルヿヲ慮ルニアラズシテ、能ク眞理ヲ言ヒ顯ハシ、或ハ明顯ナラシムルヿヲ慮ルニ在ルガ故ニ、全ク表言ノ雅致ニ注意セザルナリ。是ニ由テ學者ノ用方ノ簡潔正然タル表言ハ、曖昧ニシテ且ツ両意ヲ含メドモ、通俗語ノ用方ニ於テハ、例ヒ其正シカラザルニモセヨ、其正シカラザルノ代リニハ、却テ明瞭且ツ適切ナルヲ以テ、善敎師等モ尙學者ノ用ヒシガ如クセズ、通常人ノ用ヒタルガ如ク其表言ヲ用ヒタリ』(ハリストス敎の學術四の二十四)と然れども斯の如

き場合に於ては、一般に說敎の精神に反對せざらんことを務むべし、然らばんば普通明瞭を慮る口實を以て、隨意なる多くの冗辨を說敎中に加へ、却て之が爲に其壯嚴と確實とを害せん。

第百〇一章　常に明瞭に述ぶる經驗を得るの方法

以上に指示せる狀態に於て能く叙述の明瞭を慮るに就きて、說敎者の學ぶべきことは左の如し。

(ア)自己の生國語を其各樣なる種類及種々の關係に於て學ぶことなり、即ち書籍に於て、或い開化したる會話に於て、或は通常人の口頭に於て、即ち文法的、文學的、及哲學的に自己の生國語を學ぶとなり、其之を學ぶに助くる者い(い)說敎者を以て此の業務に定めし學校の以前の敎育なり、而して其敎育の重もなる個條の中には、必ず國語の研究を數へざるべからず、(ろ)說敎者が自己の被牧者と最も親密なる牧民的の交際をな

して、通俗語の性質と其特異とに注意するおとなり（は）（俗語を以て記載せる書籍（但し猥褻なるものを除く）、殊に智慧及俗語の精神を顯わす所の俚諺を集めて之を研究すると也に）有名なる説教者の著書、殊に其説教の平易にして、且つ能く民情に適する所の著書を讀習すること是なり。

（イ）聖書及神父等の書を文字の儘に從て熟知すること也、蓋し如何なる國語にても、其表言の平易なる丈け他の國語に近く、且其首質は約ね一般なるものなれバなり。而して聖書の言は、前已に述べたるが如く、大概皆平易なりとす、就中福音の言語を以て最とすべし。又使徒の親弟子等の書ハ非常の平易を以て殊なり。其他使徒の後嗣者、及近世の牧師中多くの者は、力めて平易なる言語を以て著作し、且つ説教せり。

（ウ）彼牧者の理會力、智識及開發の程度を知ると也、之を知る所の唯一の方法ハ、説教者の被牧者と談話するに在り。此方法は牧者の爲に得克ふ

のみならず、乃ち「司祭の本分」（書名）より引用せる或個所に於て認めたるが如く、牧者若し其本分に因て人民の諸の狀態を觀察する時ハ、常に之を詳悉することを得るなり。

（エ）教育及才能の不同なる聽衆の前、殊に其劣等なる聽衆の前に於て述ぶることなり。然れど、專ら斯の如き人々の前に述ぶるも亦、蓋し教育才能ある者は福音法の生活に於て左程教誨勸勉を要せざるが爲にあらず、乃ち説教中毫も其叙述法に關せず、唯其叙述に活氣と興味を傳ふるパリストス教の説教の精神、勢力、恩寵のあるあらバ、何人の爲にも頗る平易にして、且つ贅冗なることにあらざる也、されど十分平易ならざる説教の如きは、之を理會する才能なき或一部分の聽衆の爲には全く其結果なきをの也。

第二

説教の叙述法の品格を論ぜ

第百〇二章　総體演説の品格に關する定義及此定義を説教に應用することを論ぜ

叙述法の品格は、總て言語及表言に於て眞正の謹肅を守るに在り、之を細言すれば、言語が問題の重みと、之を述ぶる者の位置と一致するに在り。此両意に於ける叙述法の品格は、説教中に神言の説教に特別本然の特性を受けつゝ、其中に存せしめざるべからず。

第百〇三章　總体演説に於ける謹肅及殊に説教に於ける謹肅を論ず

演説の謹肅は、演説中其範圍を超過したる法外の口調、若くは法外なる語勢なき時に存するもの也、例令ば戯言は、滑稽に移らぜ、發言は爭論に渉らず、慇懃は諂諛に流れぜ、不滿は輕蔑に走らざるが如き類なり。此等

の要求は、他の諸演説に比すれば、特に説教に於て嚴守せざるべからず。又説教者は何處に於て宣教するも、猶聖堂に於て述ぶるが如くせざるべからず、蓋し其宣ぶる所は、ハリストスの教なれば也。而して聖堂に於ける謹肅は社會の集會に於ける謹肅よりも嚴重なるべきものなれば、一私人の家に開ける通常の集會に於ては、他人の聽官と感情を輕侮せざる事も、時として聖堂又は教會の集會に於ては、多少輕侮の事となることあり。是を以て説教中に閭巷の言語表言を用ゐ、或は嘲笑し、或は憤激し、或は阿諛し、或は自負すべからざる事は言を俟たざるなり。故に聖堂の講座に於て許容すべからざるの件は左の如し。

(い) 戯言なり。教育と禮讓の智識最平凡にして、且つ劣等なる聽衆と雖ども、説教に於て戯言を用ふるの全く不可なることを感ずるなるべし。而して滑稽は他の場所に於て之を用ふるも、聽衆を輕蔑するの所爲とな

らざるのみならず、却て愉快を感せしむるものなれども、苟も説教者は聽衆をして失笑せしむるが如き言語表言い勿論、麗かゝ微笑せしむるが如きことをも、尚且つ之を避けざるべからず。

（ろ）一已人、即ち或聽衆ゝ對する頌讃又い非難なり、但し特別の財産を有し、或は社會及教會に尊敬を受くるゝ堪ふる貴人、即ち教會、生國及或人々ゝ特別の恩惠を行ふ人々を頌揚するい此限ゝあらず、説教者い却て斯の如き人々ゝ對し、宜しく聽衆に代りて感謝し、或は彼等の模範を教誨に應用すべし。されども此が爲に説教者い深く其讃美し、若しくは審議する所の言語表言を擇ぶに注意せざるべからず、之を細言すれば、善人ゝ對するも、亦惡人ゝ對するも、所謂元型の模像を説教ゝ用ふるは危險なり。是れ其容易ゝ或人々ゝ適用され、又は説教者が恰も一已人ゝ關するが如き疑念の發端を與ふるに由る也。此場合ゝ於て尚は他ゝ一層

大なる危險あり、即ち吾人が生活の秘密なる点より元型の摸像をなすとなり、此の如きことい、時ゝ或い聽衆をして妄想を起さしめ、或い迷謬を生せしむるもの也。縱ひ説教者の言語の精神潔白ゝして、其心術の聖なるゝ由り、此の如き迷謬ゝ對して罪を得ずと雖ども、聖大ワシリィの認むる所ゝ依れば、固より説教者が情慾を避けしむるが爲ゝ述ぶる所たりとも、夫の腐敗したる聽衆の爲にい、却て其情慾を熾にするゝ足る也、されど斯の如き迷謬ゝ陷るゝは、此れ彼等の罪ゝして、毫も説教者自身の關する所ゝあらずと雖ども、之を傳ふるゝい宜しく戒心せざるべからず。

（は）總て通常の謹肅の感覺を輕侮する言語のみに止まらず、專ら聖堂ゝある聽衆の敬虔なる意向を輕蔑する所の言語なり。夫れ「ハリスティアニン」い教會の聖務ゝ方り、其聖堂ゝ於て執行せらるゝと、又他處に於てせ

らるゝとゝ論なく、恰も主の面前に立てるが如くならざるべからず、故ゝ教會說教の謹肅ゝ、凡そ神をして聽かしむるゝ堪へざることゝ、苟も聖堂ゝ於て云はざらんゝとを要求するなり。

第百〇四章　總體演說の威嚴及特ゝ說教の威嚴を論ず

謹肅ゝ說教ゝ於々る品格の消極的表言なり、而して此が積極的の点を成立するものゝ威嚴ゝして、專ら其問題と其說教者の位置の威嚴に適當なる言語及表言の撰擇を顯はすものなり。又威嚴とは語勢ゝ於て嚴肅及壯嚴と名くるものゝ均とし。說教の問題は、即ち聖書ゝして、之が器械となるものゝ、ハリストスの役者なり、而して說教の威嚴は通例の嚴肅及壯嚴の外ゝ、其聖なる性質を存するに在り。

說教の敘述法の聖なる性質を有するは左の場合に在り。

(い) 聖なる問題と眞理を發表するが爲ゝ聖言を用ふる時ゝ在り、例へば

恩寵は天の賚賜を示さんが爲め、機密ゝ教會の或聖務を顯はし、或ゝ神の奧義を物理界及道義界ゝ顯ゝさんが爲め、成聖は聖神を以て諸罪を淨むる意義ゝ於て、總て被害者の修整、弱者の鞏固、飢乏者の補充、聖教會の祝福ゝ以て特別ゝ人を撰び、及事物を定むるが爲に用ゐらるゝが如し。之と反對なる場合ゝ於てゝ、即ち聖物を褻瀆するとゝなるのみゝして、聖言を以て成聖せられざるゝとを示す時ゝ在りとす。

又說教の際聖人の名を稱ふるの必要ある時は、大抵彼等特有の稱呼を用ひさるべからず、たとへば、主イイスス ハリストス、至聖處女マリヤ、聖使徒パウエル等の如し。吾人は若し一般の神階(イエラルヒヤ)に於て吾人の上にある人、即ち義務責任の要求により、職位と高德とを以て吾人ゝ卓越せる人に對して、其職位若くハ吾人の彼に對する尊敬の度を表するが爲に其名を呼稱せば、豈に聖人に對し、殊に主と其至淨なる神母に對して其名を呼稱せざるを得んや

（ろ）凡そ説教が其外觀上聖書及教會奉神禮書と含蓄する所の神言と近き時と在り。これ或は説教者の位置、或い其問題の種類、或は聽衆の分限、或は説教者が傳ふる所の或事情にして、人々の位置、分限、問題の種類、及聖書、若くい教會の事情の調子と近似する場合に於て最も適當なるが故と、今左に斯の如き叙述の例として、ロストウの聖ディミトリイがロストウの牧者となりし時述べたる説教の初句を引用せん、曰く『余ガ爾等ニ來レルガ爲ニ爾等ノ心ヲ紛乱スベカラズ、蓋シ余ハ垣ヲ越エズシテ門ヨリ入リ來リタレバ也、余ハ自ラ尋ネズシテ尋ネラレタリ、且ツ余ハ爾等ヲ知ラザリキ、爾等モ亦余ヲ知ラザリシナラン、余ヲ爾等ニ遣ハセル主ノ照鑑ハ大ニシテ測リ難シ、余ガ爾等ニ至レルハ爾等ノ余ニ務ムルガ爲ニアラズ、乃チ余ガ爾等ニ務メンガ爲ナリ、蓋シ主ノ言ニ因ルニ、爾等ノ中第一トナランヿヲ欲スル者ハ衆ニ役セラルベシト云々』と。又

以上と指示せる場合の外、説教と用ふる綴字い、何處に於ても聖なる性質を受くるが爲と、聖書の表言を以て貫徹せざるべからぢ。されども此れ聖堂説教と成るべく多く聖書の言語を引用すべしと云ふとあらぢ、如何となれば此の如き叙述法は、自然説教者の言に格別の價値を與へぢして、却て叙述の明瞭と平易とを害することあれば也。其説教をして聖書の言語と類似せしむべき例い、前既に述べたるが如く、專ら教會聖書の語法とより、以て自由と言語を構成するとと在り。

第百〇五章　説教の叙述と品格を傳ふるの方法

叙述の品格にい約ね二因あり、其一は説教者の德義上の趣味に關し、他の一は説教者が聖書の語を諳んずるに關す。所謂德義上の趣味は學問に由て得らるゝものにあらずして、其行爲及生活の聖淨潔白なる功德者と交際するに由て養成せらるゝ也。聖書を諳ぜるとと關しては、則ち

上ニ指示せる說教規則の要求を滿足せんが爲に聖書を諳んぜるを以て最大便益なりとす。此れ福アウグスティンの認めたるが如く『己ノ言辭ヲ未熟ナリト思惟スル者ハ、遂ニハ自己ニ大家ノ憑據ヨリ大成ヲ得レバナリ』(ハリストス教の學術四ノ八)。

第三 叙述法の美を論ず

第百〇六章 總体演說の美に關する定義及此定義を敎會能辨學ニ應用することを論ぜ

叙述法の美ハ、說教の發育したる感情、即ち美妙の趣味と一致するより生ず。抑外部の美は、視官聽官の媒介に賴て吾人ニ作働するものにして、即ち美觀と好音に在り。此二者は共ニ吾人の言語を以て視すことを得べく、而して此二者の說教ニ價値を有するハ、唯敎會能辨學ニ就きて正

解を示されたる範圍内ニ於てす。

第百〇七章 說教の美の首要なる種類の定義

美觀は、叙述の繪畫なり。されバ說教の繪畫的に表ハるゝハ、說教に於て述べられたる趣意の、恰も繪畫ニ於けるが如く、其配置宜しきニ適し、景色位置の圖劃及其秀越したる性質の發表を以て顯さるる時に在り。此が爲に用ふる所の詞は、平易にして且つ話色ある言語、或ハ解說を附したる言語、及種々の形容譬喩等となす。其能く思想に美麗なる圖劃を與ふる所の叙述の自然的と模像的とハ、即ち皆是より發生す。

叙述の好音ハ、言語幷に表言の整然ニして、快活なる配合ニ成る。而して說教の好音ハ、說教の音調、能く種々の思想感情に應ト て正しく配置せらるゝ時に在り。故に言語及表言の組織ニ於て能く其程度を守る時ハ、說教ニ流暢若くは調和を傳へ、又說教に適當なる音調を用ふる時ハ、說

教ゑ語勢及好音と與へ、且又此等の性質をして能く說教と一致せしむる時は、思想に麗はしき表言若くは性質を與ふるものなり。

第百〇八章　以上ゑ指示せる言辭の性質を說教ゑ應用するを論ず

ハリストス正教會は、百般の事物ゑ心靈的の性質及意義を與へ、之ゑ物質的蓋蔽の下ゑ感情的以上のものを見せしめ、且つ理會せしむるが故ゑ、教會聖務の範圍內にある說教も亦心靈的の性質を有せざるべからず。而して說教の繪畫的及好音ゑ適宜なる程度に、咸く之を以て示顯せらるゝと即ち左の如し。

(い)說教の繪畫的は、常に着色摸像の甚た顯著表見ならざるを可とす(縱ひ此二者は美妙的として、而かも世の趣味に反對せざるにもせよ)、又聖堂に於て用ふる繪畫は、彩色の鮮明其度を超へ、圖劃の著しく大凸彫にして模像的なると容さゝる也。譬喩的記號の虛飾なく、將た精密もなき奉神禮の儀式も、亦同しく聖堂說教中ゑ、或程度に於て模像を容さるゝ最好の適例なり。福アウグスティンは聖キプリアンの書を、溫雅ゑして能辨學の緊要なる模範として示しつゝ、之と同時ゑ聖キプリアンが反面的より『ハリストス教ノ強健ナル學術ハ如何ナル語法ヲ催スヤ、又聖神父ハ如何ニ能ク其學術ヲ以テ其言語ヲ改造セラレシカヲ顯ハス』特別の注意を以て、斯の如き現象の奇なることを說明しつゝ、其文章は、當時第一等の格段ゑして潤詞ある說教の例なるを示せり。又福アウグスティンの引用せるキプリアンのドナトに與ふる書の個所に曰く、『吾人ハ行キ、夫ノ庭園ノ樹蔭ニ坐セン、彼處ニ近隣ノ一處ハ、吾人ニ傳染毒ナキ避難所ヲ與ヘ、彼處ニハ快然動搖スル葡萄樹ノ小枝、架上ノ周邊ニ纏綿シツゝ、爾ト共ニスル吾人ノ爲ニ綠葉ノ蓋蔽アル葡萄ノ廊下ヲ形造レリ云云』と。福アウグスティン之を評して

曰く『此ノ言ノ中ニハ驚クベキ能辨的ノ果實多シト雖モ、嚴格ナル趣味ニ快適スルヿ能ハズ、蓋シ其言辞ノ餘リ延長シ、且ツ脹起シタレバナリ』と。然れども渠れ之に尋て、聖キプリアンい爾後何時も己よ斯の如き講説をなさゞりしことを述べたり（ハリストス教の學術四ノ三十一）。

（ろ）聖堂よ於ていい、吾人の聽官を溺愛せしむるが如き唱歌を謠ふことを許さざるが如く、説教よ於ける叙述の好音も亦故らよ分外の調和と妙音よまで擴張せしむべからず。然れども、現今よ於ていい斯の如き欠点を憂ふるに足らぎ。何となれば古代い説教中に好音と使用するおとを愛し、時としていい其思想を發表するよ論理上の要求に注意せざりしが如き事さへありしと雖ども、方今或は最も新奇なる言語の性質、或は文學の他の傾向よりて、左程語氣音聲に注意せざるに至りたれバなり。而して好音の要求い詩歌よ於て其效力を有すと雖ども、是れ亦古代よ於

けるが如き程度よ於てせざるなり。故よ此種類の極端よ就て之を預戒せんよりい、寧ろ説教者よ、力めて其言語の調和と好音よ注意せんことを勸告するを緊要なりとす。されど説教中よ一般の好音の整理なきとき、往々よして個々の表言中よ此整理上よ不適當なる故障現出し得るを以て、須らく此等の極端よ注意せざるべからず。

第百〇九章　聖堂説教よ於て言語を美妙的に述ぶる鍛錬を得るの方法

法則よ因て叙述の美妙的性質を自得することゞ難し。普通修辞學に於ていい、言語及思想の樣式の完備なる分類ありて、大抵表言の美を顯はす所の凡ての樣式を蒐集せり。而して種々の美妙なる斡旋を知るの、固より無益におらざるゞ論を俟たぎゞ雖ども、只た之を一の指南よ依て學ぶおとは、常よ能辨的叙述の巧妙よ導かざるなり。凡そ説教の趣味い、主ら

言語の特賜を受けたる記者の著書を熟讀翫味するゑ因て形成せらるゝものとす。是故ゑ福アウグスティンの認むるが如く、具ゑ能辨術の規則と成遂けんよりゐ、寧ろ能辨家の書と讀み、又其演說を聞くを以て捷徑なりとす。彼又次て曰く、『其非常ニ重大ナルニ因リ、山上ニ立テル邑タル入典ノ聖書ノ欠点ナキハ無論吾人ノ言ヲ俟タザルノミナラズ、敎會ノ著作ニ於テモ亦欠点アルナシ。而シテ怜悧ナル人ハ特別ニ留意セズシテ之ヲ通讀スルモ、尙能辨家トナリ、其語法ト表言トヲ以テ養成セラル』（ハリストス敎の學術四ノ三）と。而して敎會ゑ於てゐ說敎文學の最良なる文章ゑ富めるを以て、經驗なき說敎者ゐ、須く之を熟讀翫味して、自己ゑ說敎の趣味を開發すべきなり。

第五分類

敎會說敎の傳達を論ぜ

第百十章　善き發音の効力殊ゑ聖堂の講座ゑ於ける善き發音の効力

凡そ言語を以て思想を發表する時は、其思想は外部の形體と着裝とを有して、恰も目擊さるゝ者の如く顯ゐるゝものにして、尙且つ言語が思想の意義及性質ゑ相當するゑ從ひ、思想は之を傳へらるゝ聽者の爲ゑは、益々明瞭ゑして妥當なりとす。若し然らぜして之を書ゑ筆し、或ゐ一の死字と以て授くる時ゐ、悉く其含蓄せる所の思想を發表することを得ぜ。但た能く文學上の文章を誦讀する者は、常ゑ已が目前に觀念する所の技術の彫刻、若くゐ繪畫たる言語を活働しつゝ、多少其文章中ゑ活

氣を噓き入るゝ也、されど言語を以て思想を授くる時ゝ、啻ゝ之のみゝ止らず、所謂思想ゝ目擊さるゝが如きものとして顯いるゝのみならず、乃ち活潑にして恰も活動するが如く顯はるゝ者とす。蓋し思想は之を述ぶる者の形体を藉りて發表するが故ゝ、善き發音は言語の最も成功ある働きの一要素たるなり。

說敎の眼目至て高尙且つ聖なるゝ從ひ、說敎者は益々其發音の善美ならんことを勉めざるべからず。苟も之を輕忽ゝ付するは、己の怠慢なるか爲ゝ、充分聽衆に對して活動し得べき功力を奪ふものなり。如何なる時ゝまれ、甚しく發音を假裝するは、固より嘉みすべきおとゝ非ずと雖ども、自已の不注意なるが爲ゝ發音の不熟錬なるゝ、特に欠点の最大なる者と云ふべし。

第百十一章　發音を組織するの要素

發音の定義中ゝ入る者ゝ、第一音聲、第二發言、第三態度是なり。今左ゝ之を各論せん。

第一　音聲を論ず

第百十二章　音聲の適當なる整理を說敎ゝ傳ふるゝ何に成立するや

發音ゝ於て最も緊要なるは、天賦なる音聲の整理、即ち音聲の强弱、高低、緩急、絶興等を知るに在り。

第百十三章　音聲の强弱

同音律の音聲は、意義及思想の性質ゝ關して、或ゝ之を强むべきことあり、或は弱むべきことあり、此れ音樂の音聲漸高（クレスセンド）、音聲漸減（ドミニュエンド）ゝ相當す。例へバ『神ハ凡ソ吾人ノ行爲、言語、思想、希望及靈ト心ノ隱レタル動作ヲ視、且

ッ之ヲ識ル』と云へる語と叙述せんよ、爰よは吾人の音聲を動かすべき音律の變化を要せゞ、唯一般の意義の如何よ應ト て其響きを強めつゝ、音聲の緊張力を換ふるを以て必要となすのみ。之と反對の場合、即ち互よ連續する釋義を同一よ發音して、一般の意義と減殺微弱ならしむる時ハ、斷えゞ音聲の緊張力をも弱めざるべからゞ。例へバ『諸ノ善ト敎トヲ以テ責メヨ禁ゼヨ勸メヨ』といふ語を述ぶるよ際してハ、最后の責めよ禁せよ勸めよなる言ハ、漸次よ音聲の響きを和らげざるべからゞ。此規則ハ啻よ文句の一言一語よ關するのみならゞ、全文句及小段落よ於ても亦之を應用せんことを要す。此規則を守らざるが爲よ免れざる所の欠點は、同音、即ち平音よして、是れ其語勢を殺ぐもの也。

第百十四章　音聲の高低

音聲を高低するハ、語勢、思想、及感情の性質よ隨伴するものよして、吾人

ハ通常の對話よ於ても亦自から高調より低調よ下げ、低調より高調よ上げつゝ音律を換ふるものなり。然れども斯く對話に於て自から爲し得る所のことも、悲哉筆記物を傳ふる時、殊よ特別よ準備したる說敎を傳ふるよ際しては、全く之よ反して然らざることあり、且つ往々發音は全く高低をなさずして、約ね甚たしき單純音となることあり。說敎者は音律の優美なる不同、及一調より他調よ轉換するの術よ注意せざるべからざるハ勿論なるも、所謂發音の戲曲ハ、聖講壇の上よ於てハ之を嚴禁せざるべからず。されど單純音の說敎も亦一層不可なりとす。聖堂の朗讀物よ於ては多少一樣の音律を守るを適當とすれども、聖堂說敎よ於てハ、之に反して會話的よ說話すべきものなるが故よ、宜しく言語を良好なる對話的の發音よ近似せしめざるべからゞ。

說敎よ適當なる音聲は、殊よ中聲なる音律の範圍內よ於て發音せざる

べからぜ。然れども音聲の一樣なるハ最も不可なり。說敎者ハ中聲、或ハ若干の音律を選びて、斷えず同音聲の高低を復するを甚た鮮しとせぜ、是れ聽衆をして厭睡を催さしめ、退屈疲勞せしむる所以なり。吾人ハ天性の音聲中、萬事ヨ適當なる音律を發見しつゝ、愉快なることを愉快に、悲哀なることを悲哀ヨ、壯嚴なることを壯嚴ヨ言ひ顯ハすべき才能を有すれども、說敎者ハ講座に於て屢々一の悲しき同一なる音律を以て說話することあり、斯の如き一定の音聲ハ、恰も搖錘の昇降するが如く、或ハ上より下ヨ降り、或ハ下より上ヨ昇りて、唯た上下ヨ動搖せるのみ、即ち悉く皆同一の傾向ヨりて動搖するヨ過ぎず。或者ハ此を以て恰も一定なる規則の如くすることあり、何となれバ彼等ハ聖堂の講座ヨ於ける特別の叙述を以て不適當なりと思ふが故なり。吾人ハ通常の對話に於ては、其談話中に一の音律ヨ他の音律ヨ自然の移動を聞き、公

然たる說敎の時には、却て一樣なる習慣的。且つ多少憂悶の發音ヨ疲勞することと多しと雖ども、聖堂の謹肅ヨまれ、說敎者の分限にまれ、將た敎會說敎の問題ヨまれ、聊か吾人より斯の如き死語を要求するヨあらず却て說敎者の言語の其口ヨ於て活動し、且つ思想と感情の諸の性質を、其言語の中ヨ發表せざるべからぜ。

聖堂說敎の性質の種々なる個所の發音に關しては、個々に左のことを認むるも亦無用の辨ヨ非ざるべし。

(い) 問題ヨ於ける平易の叙述講話等ハ、多く音聲の高低を要せざるを以て自から平等ヨ靜穩ヨ發音せざるべからぜ。此れ音聲の律呂をして後ヨ必要なる個所ヨ於て特別の緊張力及勞力を用ひぜして高低ならしむることを得んが爲なり。

(ろ) 說敎中思想及感情の特別なる發動に因て殊なれる個所は、自から音

律の特に各樣ならんことを要す。即ち疑問と答辨、叫喚と驚愕、預戒、譴責、祈禱等は、說敎者の音聲中に於て相當の音調を有たざるべからざる例へば思想と感情の强き所に。必す音聲の特に高からんことを要せざるべからざるも之に反して往々靈の內部の動きの豐なる程度に應じて言語を省略するが如く、音聲も亦往々其言語の力ある所に於て左程强く緊張せざるとあり。特に牧者の譴責に方りて大聲を發するは不可なり。何となれば眞正ハリストス敎の說敎の精神上より之を論ぜれば、譴責は憤怒及不滿足の精神を以て貫徹せざるべからず。救世主に「ファリセイ」に向て「此世ノ人何ヲ休徵ヲ求ムルヤ、我誠ニ爾等ニ告ゲン、休徵ハ必ズ此世ノ人ニ與ヘラレズ（マルク八ノ十二）」と云われしときの如きは、則ち大喝の聲音に非ず、聖福音者が豫め「心ノ中ニ深ク歎息シテ」といふ言を以て認めしが如く、主が高義なる規責は、

深き哀憐の音調を以て發顯せしや明なり。又主は士子「ファリセイ」に對して、爾等はモイセイの位に坐して云々と言われたる時も、亦恐るべき規責の言なりしと疑なし。又聖金口が大金曜日に於て演劇場に至れる人々に對して、非常に强き規責の言を述べし時の如きも、終始悉く絕叫憤怒の語氣を以てせりと思量すべからず。此時に當りて聖金口の音聲の高からざりしのみならず、乃ち深き憂愁と歎息を顯わしたりと思惟するを以て却て穩當なりとす。若し果して然らざれば聽衆は、其言語を聞きて、此が實際に生せしが如く涕泣して感動するに至らざりしならん。

（は）聖書及諸般の本文より引用せる個所に、縱ひ如何なる項に取るも、又此等の個所の意義及其叙述の幹旋に、所謂發情的の性質なるも、自己の言語に比して最も平靜に發音せざるべからず。然らざれば說敎者に實

ゝ其引用せる或言語を述ぶるとも、自ら己の言語を述ぶるが如く顯はるれば也、蓋し此等の言語ゝ憑據として之を引用し、殊ゝ聖書の本文を發音する時ゝ、最も嚴重ゝ注意せざるべからず

第百十五章　音聲の緩急

發音に於て音聲を延長する程度は、言語及文句の輕重如何ゝ由て之を定めざるべからぜ。此程度ゝ於て最も首要の釋義及文句は、語辞ゝ力を込めて其特異を顯ゝさゞるべからぜ。又增補の釋義及文句は、其首要なる釋義及文句に比較して、或ゝ最も急速ゝ、或ゝ最も緩慢ゝ發音すべし。凡そ此の如きゝ總て音調の轉換ゝ均しく、通常の對話ゝ於てゝ自から守らるゝことなれども教會說教を發音するゝ際してゝ、屢〻之を破ることあり、されども說教の言語及文句の輕重に注意せぜして音聲の度を附する時、即ち緩急同一に發音する時の如きは、肯て不可なることなく、又不愉快なるとなし。假へば「順從ハ教誨若クハ命令トシテ聽ク所ノ事ニ從フヿナリ」と云へる語を叙述するゝ方りて、爰に三の首もなる釋義ゝ、音度の延長を以て異ならざるべからず、否れば爰に引用せる所の定義を明瞭ゝ理會すると能ゝざる也。

凡そ教會說教を述ぶる一般の速度ゝ、諷詠ゝ近き所の遲緩と、走讀ゝ似たる急速との中庸を有たざるべからず。緩緩ゝ述ぶる者ゝ己の思想を顯ゝすに言語を切斷して吾人の聽官と注意とを疲倦せしめ、又其發音毎ゝ聽衆を待しむ。而して此が欠點は、約ね言語の短文句より成り、且つ其性質に依て平穩なる發音を催す時ゝ、其感ぜる所尙は甚たしきに至らぜと雖ども、言語の小段落ゝ移り、或ゝ其意義上發音の特有なる活動を要求するに當て、談話の著しく遲緩なるゝ、注意熱心なる聽衆と雖ども、尙之ゝ耐ふると能ゝざる者なり。又一の極端は、發音の甚しく急激な

ることにして、遲緩に比較すれバ更ニ惡しく、且つ不快なるものと謂ふべし、蓋し說敎者の急言走語も、啻ニ其斷續を甄別し難きが爲に、聽者をして說敎者の言語を察知せざらしむるのみならず、乃ち其語る所の意義をも併せて理會すること能ハざらしむれバ也。此欠點ハ往々天性の早語なるに基原すと雖ども、大約走讀の習慣より來る所の一弊たり。されども、此早語の癖を治すること亦甚た困難なるものニ非ず、即ち自ら注意して唯彼の習慣なる急激の發音毎ニ、力めて其言語を檢束控掣するニ在るのみ。

第百十六章　發音の中止即ち猶豫

發音の中止、所謂猶豫をなさんにハ、宜しく之を巧にせざるべからず。此時に方りて最も緊要なる規則ハ言語間の區分、及其各樣なる表言の狀態ニ應じて大小の音聲の間斷、即ち左の如く休息をなすに在り。

(ア)先つ最初ニ『父ト子ト聖神ノ名ニ依ルアミン』といふ讃詞を述べたる後少しく猶豫して、說敎の本文、即ち序言に移るを適當なりとす。蓋し此の如き機會ニハ、宜しく說敎の凡ての言語間ニある中止と相比較して最も大なる猶豫となさゝるべからず。

(イ)最初の經句の後ニ中止せんニハ、之を說敎の各部分の後に於てすると均しくせざるべからず、是れ發音中、其性格ニ從て特別を要する所の者を混せざらんが爲なり。

(ウ)說敎中ニ於て釋義と文句の關係を示さんが爲ニ大ならざる中止の必要あるが如く、音聲の關係の爲に必要なる小中止も亦た自から句點を附する所に於てせざるべからず。

(エ)言語の中絕する時、若くハ問題の深入を要求する問詞を起す時ハ、個條及問詞の後ニ於て稍大なる猶豫をなさんことを要す。即ち第一の塲

合に於てゝ聽衆をして、說敎者の思想ゝ導くことを得せしめんが爲め、第二の場合に於ては、最も强く問詞の重みを認め、而して其解答を切望せしめんが爲め也。

總ての猶豫及中止ゝ關して認むべき事は、(第一)如何なる場合ゝ於ても、猶豫及中止の甚だ長からざらんことを要す。然らざれば說敎者は屢々其語るべきことを忘却し、或ゝ强て其言の連續を待しめ、以て已が言を誇るとを示せば也(第二)猶豫の爲ゝ音調間の接續を失はず、前調を以て自から後調を貫かんとを要す。然らざれば說話中毫を何等の流暢もなくして竟ゝ全說敎の感覺を害すべければ也。

第二

發言を論ず

第百十七章　善き發言の特質

文字熟語及言辭を正當に發言するゝ、良好なる發音法の第二の要因なり。發言の宜しきを得るは、凡ての言語を明瞭ゝ發音し、言語の文典上の規則及發音法の要求ゝ應じて發音せる時ゝ在り。是よりして生ぜる發音法の緊要なる性質は、即ち明瞭及正確の二なりとす。

第百十八章　發言の明瞭

發言の明瞭なるゝ、文句の一言一句に圓滿なる音聲、及完全なる節度を附與するゝ在り。之ゝ反則するは、言語を隱蔽する時ゝ在りとす。言語を隱蔽するゝ、或ゝ發音の急速なるより生ずることあり。或ゝ音聲を延長するに因ることあり、若しくゝ單に發言ゝ不注意なるゝ原するとあり、又は屢々小段落の始終、殊ゝ終りゝ於て全言を隱蔽するとあり。斯の如きゝとは精神を以て發言して、音聲を以て發言せざる時ゝ在りとす。故に聽衆ゝ往々唯說敎者の言語の半ばを明瞭ゝ聞き取るのみゝ

て、殘餘は即ち自己の想像を以て補はざるべからざるに至るなり。此の如きは僅に小數の人々の爲し能ふ所なれども、何人にも望むべからざる事なり、且つ総じて非常に不快あるものにして、說敎に注意する程一層不快なり。既に說敎者の叙述法に於て第一緊要なる要點に、一般に理會するとたるが如く、發言に於ても、一般に明瞭たらんことを最も肝要なりとす。而して第一の場合に於ける叙述の欠點は、他の如何なる性質を以てするも之を償ふこと能はざるが如く、發言の欠点も亦毫も間然する處なき他のものを以てすとも到底之を償ふこと能はざるなり。

第百十九章　發言の正確

發言の正確とは、一語一言に正音を附し、且つ其語氣の抑揚を正理するに在り。凡そ筆記物を發音する時は、全く自然的に顯はれざるものなり然して他の一方より云ふも、聖堂の講座に於て發言に全くの自由を許

容するは正しきことにあらざるが故に、說敎者は斯の如き場合に於て左の規則を守らざるべからず。

(ア)聖書及敎會書の經句を發音するに於ては、必ず書籍上の發言法を用ひざるべからず、苟も社會に於て用ふる所の發音を以て聖書の言語を發音するは不可なり、蓋し經句の重みは、發音を以て普通語に異ならしめんことを要すれば也。而して眞正の敬畏を以て聖言を發音する者は、心靈的謹肅の感情によりて此要求を成遂ぐる也。此要求は又聖書の言語より聖堂說敎に入る所の凡ての言語にも布衍せざるべからず、殊に神及諸聖人の名稱並に聖物の名稱等に於て然りとす。蓋し說敎者の言語にして讃詞及祝文の性質を受け、且つ其聖語は悉く單に聖書及敎會の精神のみならず、乃ち聖書及敎會の言語を以て貫かるゝ以上は、斯の如き個所をも尙經句と均しく發音するを最も可なりとす。

(イ)常に純乎たる地方の發言をも輕視すべからず。苟も說敎者が彼此の被敎者の發音と異なる言語を以て發言したるが爲に、彼此の人民に誤解さるゝが如き恐ある場合に於ては、特に之を輕々視すべからず。然れども此規則を擴張するは不可なりとす、如何となれば、是れ要求に非ずして、唯止むを得ざるの場合に於て之を許容するに過ぎざれば也。故に說敎者が其被敎者の發言を知るゝ決して不可なることにあらず、是れ時として、或言語の格段なる發言を以て或両意を避け、若くゝ剩へ諧謔の發端を與へざる等の利益ありと雖ども、總體より論ずる時は之を知るべきも、無論人民の不正なる發言に習ふべからず、否最も純乎正然たる言語を以て其聽衆を敎へざるべからずと云ふにあり。

第三

態度を論ず

第百廿章　發音に於ける態度の價値

吾人の感情及思想を發表し得る者は、豈單り言語のみならんや、人の靈と心の中にある所のことを他人に授くるや、申さば全体が語りつゝあるものなり。然り而して言語ゝ實に人の靈に生ずる万般のことを發表する最好の機關なるを以て、苟も言語なきときゝ、吾人は靈の靈たる妙力を顯ゝすと能ゝずと雖ども、更に言語は唖唖たる肉體機關の作用と合する時に於ては、最も完全に最も活潑に之を顯すことを得。何んとなれば、說敎者の眼目、位置、動作ゝ、言語に大なる勢力を傳へ、且つ言語に先たちて思想及感情の發表を預告し、言語と以て未だ全く演べざる所のことをも預示するものなれば なり。斯の如きことは、皆自然に日常吾人の間に行はるゝことなれども、開發せる趣味の要求に應じて之を行ふときゝ、特別なる價値と品格とを受ぐるが故に、古人ゝ演說上の動作を

名つけて体の能辨と稱したりき。

第百廿一章　態度に關する規則の性質

演説上の態度い、必ずしも一定不變の規約あるものゝ非ず、否規約すべからざる者なり。此動作い自然ゝ思想及感情の反射鏡となり、且つ自然ゝ靈魂の動作を顯いす時を以て最も可なりとす。故ゝ之ゝ關する規則は、最も多く消極的ゝ規定せざるべからず。抑も顏面、眼目等い如何なる態度をなすべきや、或は、種々の思想及感情を傳ふる時は如何なる動作をなすべきや等のことい、預め之を指定すると能いず。若し一方より之を論する時は、習熟したる動作は多少傲慢なり、又他の一方より之を論する時は、啻ゝ聽衆ゝ對して功益を與ふると能はざるのみならず、又愉快なる感覺を惹き起さしむること能いざるゝ至るべし、是故ゝ講座ゝ不適當なる位置と預戒し、顏面及其各樣なる態度の適宜と、或謹慎を學

ぶゝは、說敎者の摸擬すべからざる擧動を以て其界限を示すことを得。斯の如き規則と預戒い全く說敎規則ゝ適當なりと謂ふべし蓋し聖堂の謹肅い前章既ゝ述べたるが如く、凡て他の謹肅より更ゝ嚴重ゝして、パリストス敎の敬虔と同主義たるべきが故也。

第百廿二章　態度に關する汎則

總て態度ゝ關してい、說敎の繪畫的及好音に就きて論じたる個所ゝ於て認めたると同一ゝ認定せざるべからず、即ち態度は思想感情を發表するゝ方り、甚しき摸寫的及摸造的たるべからず。概して敎會說敎に於て喑啞たる機關、即ち態度の關係なくして發音する時は不適當ゝして、凡そ事の何より生じたるかを論ぜず、知らぜ識らず、傳ふる所の者ゝ活動と實用の不足なるゝとを顯はすもの也。然れども聖堂の講座ゝ於ては、唯世俗の劇場ゝ於て用ふるが如き放肆なる擧動と驚くべき手摸等

を用ふる時は、却て一層不可となす、故に說敎者い此極端の間ゑ於て須らく中庸を持せざるべからぢ。

第百廿三章　講座ゑ於ける說敎の動作ゑ關する個々の注意

(第一)講座ゑ於て說敎する者の一般の位置(第二)說敎するとき說敎者の全体の機關の位置、態度及擧動ゑ關して詳細ゑ認むべきことは左の如し。

第一

講座に於て說敎する者の一般の位置は、謹肅の要求ゑ應ト て左の如く維持せざるべからず。

(い)說敎者の体勢は、天然自然の狀態及日常他人と對坐の時と等しく平夷の狀態を維持せざるべからず

(ろ)說敎者若し草稿の助けゑ依て述ぶる時い、甚しく躰軀を其草稿の所

在ゑ傾け、或い後方ゑ回轉すべからぢ。殊ゑ講座ゑ傾斜し、若くは前ゑ倚り掛る等い最も不可なりとす。

(は)全體と運動しつゝ數歩前方ゑ進み、或は左右ゑ向ひ、或い時ゑ後方に退くことを得、然れども之をなさんゑは、凡て温和靜肅ゑして急激の擧動をなすべからぢ。而して左右の運動は他の擧動より其度數多きを以て、之をなすゑ當りて特ゑ注意すべきことい、此等の擧動の(一)余り一樣ならず、及數々せざる事(二)言語の明瞭ゑ妨碍なき事(三)最も多く或人々に向ふが如く見えざる事、殊ゑ多少規責の点を述ぶるに際しては、或人々ゑ向ふが如く見えざる事等是なり。

第二

說敎する時の身體諸機關の位置、態度、及動作ゑ關して重要なる者を(い)說敎者の頭(ろ)顏面(は)眼目(に)手等とす。

(い)頭部ハ第一ニ眞直ニ維持し、及聽衆の諸方ニ向ふときは、全體と共ニ之を向くるを以て最も適當なりとす、或は頭を高度ニ仰ぎ、又ハ垂下するは不可なり、殊ニ之と左右ニ震動し、若くハ上下ニ領垂する等は最も不可なりとす。

(ろ)顏面の諸点ハ、聖嚴と整肅とを合せて且つ温容を顯はすべし。喜悅の感情を顯ハす所の温和なる言語、若くハ杞憂の感情を顯ハす所の端嚴なる言語は、偖に此顏面中ニ顯はるゝもの也。說敎者の顏面ニは格段なる端嚴も、特別の柔和、微笑、悲哀の情態も亦反射せざるを可とす。然れども此れ其顏面諸点の整然として動かざらんことを力むべしと云ふニはあらず、乃ち說敎の性質及表言に於て如何なる感情と雖ども決して過激の境界ニ移るべからざるが如く、說敎者の顏面中の如何なる現象も亦激烈の階級ニ渉るべからざるを云ふなり。

(は)說敎者の眼は、或機會を除くの外ハ、常ニ聽衆ニ向ハざるべからず。然れども、一物ニ向ひ、殊ニ一己人ニ注がざるあとを力むべし。祈禱のときハ、自然眼を上部ニ向け、或は聖像ニ向ける者なりと雖ども、頭部及全体は平常の位置を變せずして祈禱を献ずることを得。此の如き場合ニ於て目ハ更ニ那處ニも向ふことなく、恰も說敎者の思想感情と共に彼自らの中ニ集合せらるゝが如し。若し又發音ニ於て手の動作を用ふれば、目ハ輕蔑の意と顯はそ時を除くの外、此等の擧動の後ニ尋ぐものとす。感情の激動する時は、說敎者の目は知らず識らず涙を以て濕ふことあり、然れども說敎者ハ靈と感情の甚しく活動する時ハ、宜しく自ら己を勵まして涙を抑へざるべからず。蓋し講座ニ於て涕泣するは、(善き感動力ニ生ずるとき)(卑すべきとは非ざれども)勿論失笑するが如き不適當ニは非ずと雖ども、勉めて之を戒めざるべからず、

(に)手の擧動、即ち手眞似をなすよい特別の巧妙を要す。說敎者い手眞似を用ゐずして說敎するも、固より不可なるよあらずと雖ども、能く手を以て動作し得るときは、大に發音よ勢力を附與するもの也。然れども其宜しきを得ざる時は、亦大に言語及び品格を傷くる者なれば、手眞似は常よ自然たらざるべからず、流暢ならざるを得ず、自由たらざるべからず、又活潑よして各樣たらざるべからず。而して茲よ注意すべきことは左の如し、(ア)手眞似い摸像的よ動作すべき所を、强て精密よ失し、或は甚しき具体的よ走るべからず。例へば桎梏のあとを述べつゝ、手を組合して桎梏されたるが如くし、或は高しと云ふを形容して手を延べ揚ぐるが如き等い不可なり。(イ)流暢なる擧動の假裝よ移り、及質朴なる擧動の放肆輕蔑の擧動よ移るべからず。(ウ)手眞似の快活よして多樣なる時い、殊よ注意して毫も溫和ならざる擧動、所謂忿怒の狀態を表はすべからず。例へば、講座を乱打し、指示を以て聽衆を驚嚇し、拳を以て自己の胸を扑ち、或い手を充分よ伸張し、股を敲き、及一切高慢を顯はす等のことをなすべからず。苟も斯の如きと、及之に類似のとい、聖講座よ於て爲すよ忍びざるの事なり。然れども、斯の如き不穩當のとに陷るい非常よ容易なるものなれば、說敎者たらん者は宜しく虔て茲に注意せざるべからず。是故に敎を傳ふるよ際して能く動作するあと能はざるも、動作を用ひんと欲するものい、宜しく先つ凡ての場合に於て、以上よ指示せる動作の失点に注意して、機會の至る迄質朴よして自然なる擧動を用ふるに止めざるべからず。又他人の擧動よ擬することを戒むべし、且つ常に此場合よ於ける首要なる眞理、即ち適宜の動作い、唯心中より發生する時よのみあるあとを忘るゝ勿れ。

天性良好の演說家となるゝ堪ふる者甚だ鮮なしと雖ども、凡そ何人と雖ども若し其事の要求に應ゝて從事するゝ於ては、天性の發音よりも尙は一層善美なる發音を能くすることを得べし。又天性大ゝ音聲、發言、姿性等ゝ缺くる者と雖ども、己の欠點ゝ打勝ち、其天性が曾て彼等ゝ辞せし所の難事も、只熟錬を以て補はんと決心して卓絕の能辨家となりしとあるは、古來著しき事實なり。是ゝ依て之を觀れば說敎者が此關係ゝ於て完成を奏するゝ實ゝ容易の事業なりとす。何となれば說敎者の要する所は、唯善良なる說敎者たるゝ在りて、著名なる演說家となるゝとゝ非れば也。之に關する至近簡短なる方法ゝ左の如し。

(ア)唯意味ゝ注意するのみならず、能く言語の性質ゝ注意し、併せて種々の意義言語を發表するゝ、高聲を以て徐ろゝ之を誦讀すると是也。されば、凡ての場合に於て走語ゝ慣習するゝ不可なるとゝして、常に默讀す

るも亦弊害なしとせず、是故に時々高聲を以て誦讀するゝ、各人に緊要且つ利益なるを以て、說敎者は宜しく發音を完成するの方法たる誦讀を利用すべし。

(イ)樂譜を知り、及之ゝ練習するも亦益あるのみならず、時としてゝ大に愉快を感ずるものなり。總て正しき唱歌ゝ音聲を開發して、之に柔軟を傳へ、聽官をして節度、流暢及調和ゝ習熟せしむ、況んや此等を發音に運徙し、又發音の最良なる性質を組織するとの容易なるゝ於てをや。

(ウ)說敎を發音するゝ便誼の時を得て能く之ゝ準備すること是なり。若し斡旋ゝ困難ゝして、自在に講座より述ぶる充分の鍛練を得ざる間ゝ、斷えず草稿を見て自己の注意を放散せざらしめんが爲に、寧ろ準備せる所の說敎を諳記するを勝れりとす。少なくも說敎の性質ゝ依て發音ゝ非常の元氣と熱心を要する所の格段なる個所を諳記せざるべから

す。蓋し屢々草稿を偷視し、及ひ時に臨て差支ふるゝ殊に不可なれば也。

(エ)最も首要なるゝ、說敎者が傳ふる所のことに活々たる同感を有し、及一言語が、其言語に於て顯はさるゝ、思想感情と全く合同して、聽衆に利益を與ふる眞實の希望及自己の業事に對する無欺の愛を有つこと是なり、若し此等の注意なき時ゝ、最良なる發音も徒らに不活潑となるや必せり、之に反して前陳の規則を遵守する時ゝ、說敎者の言語ゝ常に冷淡なる死語とならずして、其思想感情は自ら說敎者の音聲擧動に發表せん、而して此善良なる發音の諸規則を守るゝ、說敎者に於て至難のことには非る也。

第六分類

草稿なき說敎卽ち卽席(イムプロウイザーチヤ)說敎を論ず

第百廿五章　卽席說敎の定義

凡そ說敎を演習するゝ、唯に草稿を見、又ゝ之を諳記して演壇より叙述するを以て限るべからず、故に說敎者たらん者ゝ、須く卽席の演述に習熟せざるべからず。

「イムプロウィザーチヤ」なる語は、其狹義に於てゝ何等の準備もなく、又豫め問題をも擇ばざる一般の說敎を云ふ。然れども斯の如きまとゝ、說敎に於て稀に要求せらるゝことにして、且つ稀に許容せらるゝこと也。兎に角卽席說敎は右の如き意義にのみ理解すべき者にあらず、乃ち卽席說敎とは、預め準備することを排斥せざるのみならず。却て之を要求す

るものゝして、唯或特別の機會ゝ於てのみ之をなし得るものとす。總て說敎者は草稿なくして說敎し得るゝ非るよりゝ、容易ゝ演壇ゝ登るべからず。之ゝ反對すれバ、說敎者は即ち神の業事を怠慢するものゝして、己の本分ゝ對して罪なき能ゝず。聖使徒斯の如き者を罪して左の如く云へり、曰く、『凡ソ等閑ニシテ神ノ業事ヲ爲ス者ハ詛ハル』と。故ゝ即席說敎とゝ、預め問題を擇まず、之を推究せざることを云ふにゝ非ずして、之を換言すれバ、說敎者の腦中ゝ成稿せる思想感情を自由に述ぶるを云ふなり。說敎者は說敎を準備して、己の種々なる思想、若くは全說敎の主要なる順序、若くは其或部分を紙上に記載することを得ると雖ども、此れ純乎たる即席にあらず、純乎たる即席ゝ、即ち說敎者が說く所の一言一句も、之を紙上ゝ記載すべき必要なきが如くゝ其の思想を自由に發露し得べきを云ふゝあり。

第百廿六章　即席說敎の肝要なるを論ず

便宜ゝ從ひ完全なる組織を以て說敎を准備することの有益なるは、爭ふべからざる事實なるのみならず、又甚だ緊要なりとす。吾人は自己の思想を紙上ゝ記載して、恰も之を自己の爲ゝ見得るものとなし、及之を智識の判斷ゝのみ附せずして、視官及聽官の外感の證明にまて屬する所の外物として自己の論評ゝ附し、以て其文章を辨別する時は、吾人ゝ其關係の如何ゝ應ト て、各思想ゝ適當なる解釋を與へ、其關係の力に準ト て證據、解明、勸說を配置し、且つ可成的表言の精密、正確、及其他の性質ゝ就きて思考し、以て其文章の意義言語をも亦漸次ゝ完成するの便利あり。又說敎者ゝ完全ゝ說敎を准備したる時ゝ、凡て說敎ゝ何等の准備なくして公衆の前に述べんと決定したる者の容易に遭遇する所の混雜を疑懼するが如きおとなく、泰然として登壇することを得、而して精心

の平安なるゝ、實ゝ公開說敎の最良なる一大要素なりと云ふべし。

然れども記載したる說敎は如何ゝ善美なるも、全く說敎者の口頭を以て直接ゝ其衷心より出づる所の活言たらざる也。故ゝ說敎者は豫め其思想感情を着裝せる表言を復しつゝ、自己ゝ思想感情の發生と隨伴せる靈の內部の發動を感せざる時は、自然他人をして亦其發動を喚起せしむると能ゝず。されゞ說敎ゝして說敎者の心中ゝ生ぜる所の直接の表言に非ずして、唯記憶若くゝ草稿に依れる往時の思考及感覺の再造たるに過ぎらしめゞ、其說敎ゝ多少の冷淡を免るべからず。此れ草稿ゝ依賴して述ぶる第一の弊害ゝして、即ち筆記せる說敎を其儘直ゝ重複するゝ、如何なる場合ゝ於ても望ましからざる者なり。說敎者若し全く其說敎を準備したりとするも、此場合に於て亦說敎者ゝ奴隷の如く其記憶若くは草稿ゝ拘泥せず、乃ち記載せる說敎を、可成自在ゝ授くることを勉め

ざるべからず。然らざれゞ其說敎中常ゝ機械的のこと多くして、到底死物たるを免れざるなり。次に說敎者ゝ準備したる說敎のみをなして、敢て即席說敎ゝ慣れざるゝ於てゝ、時ゝ或ゝ好機會と利益ある敎誨ゝ說敎者と促すことあるも、說敎者ゝ預め之を先見する能はざるが爲に、己の說敎中ゝ之を包含することを得ずして、往々心ならずも默止せざるべからざるおとあり。例へゞ、說敎者ゝ聽衆の了解せざる事と、其說敎ゝ注意を顯はさゞる事とを認むると容易なるゝ、毫も斯の如き事と見ざるものゝ如くゝして、縱ひ自ら空氣に向て述ぶることを感ずるも、說敎の順序を變換することと能はずして之と連續することあり。說敎者ゝして臨機應變の才なきときは、必ず說敎の進步に妨害あることと甚しとす。故を以て說敎者は常に預め凡ての說敎を筆記して講座より述ぶる時は、其說敎は到底遺漏なき能ゝず。

故に說敎者ゝ切望すべきことゝ、假令ひ大成ゝ至らざるも、所謂即席說敎家とならんことを也。是を以て將來の說敎者は須く便宜の時を得て即席說敎ゝ學習すべきなり。

第百廿七章　即席說敎ゝ習熟し得るを論す

即席說敎は、假令ひ凡ての場合に於て容易ならざる事なりと雖ども、亦多少天然非凡の稟に出つる所の術なりとなすゝ、實ゝ正理ゝあらざるべし。凡そ言語の發育ゝ、思想と相比例する者ゝして、言語を以て思想を發表するの容易なるゝ、約ね定義及表言の明瞭なるより生ずる結果なりとす。實に人々が已の理會し及知了せることを他人ゝ授くるの方法ゝ、悉く同一なる者にあらず、或者ゝ其知れる萬事を自から自由ゝ叙述し得るの福賜を有し又或者ゝ緻密なる思想及智識を有するが爲ゝ、却て其表言の發見に困難することあり。然れども即席の非凡なる才能あると、全く即席の才能なきとゝ、共ゝ多少格外の現象なり、概して即席の才能ゝ、說敎者の靈能の開發と、言語の發育の程度に應ト て優劣あるものなれバ、能く已の思想を紙上ゝ叙述し得るものは、已に即席術ゝ適當なる前表なりと云ふ事を得べし。何んとなれバ文章と即席との區別は、主ら彼是の場合に於て、思想を以て其趣意を包括し、及之ゝ相當なる表言を發見する遲速の如何ゝある者なれバ也。此區別ゝさはど著しきものゝ非ざるを以て、充分即席に熟練せんと欲せバ、自已の思想を口述するに於て、須らく特別の健忍と怜悧なる錬習とを要すべし。

說敎ゝ敏辨的演說の如く修飾を要せざるが故ゝ、普通神學の充全なる敎育を受けたる者は、容易ゝ即席說敎ゝ上達することを得べく、唯た說敎者は眞正の感動と熱情より自已の聽衆と偕ゝ自由に講話するおとを得バ足れり。されども之が爲ゝ必ず能辨家の材幹を有せざれバ能は

ずとなすべからず、故に事に於けるの熱心と、事に於ける肝要なる準備をなす時い、凡才なる者も、容易に自由の講話に錬達するおとを得。而して吾人の中即席説教者に不足と感ぜる所以の者い、重もに即席才能ある人の乏しきが爲に非ずして、即席説教に準備せざるに由るなり、

第百廿八章　即席に準備する一般の方法

凡そ普通教育にして正當なるときい、自由に思想を口述するとを得べき言語の發育に、裨益あるものにして、此關係に於て特に重要なるい、(い)論理法及思想の樣式を實際に學習し、及應用すること也。凡て正しく諸の事物を理會せんにはい、或い疑問を起し、或い其組織を分解し、或い之に正當の定義と附するに在り。是れ即ち一般至言の重要なる規約とす。説教に於て論理法に習熟するには、二人若くい數人の對話者と數々學術的論議の樣式に依て、意義に富める問題の文章を演習すると、疑問を口

述的に研究するとの二ッを以て達し得べし。然れども之れを以て未だ全く足れりとすべからず、宜しく經驗ある教師の之を監督して談話の自由なる流動を妨碍せず、唯問題圍外に渉るとを矯正すると、同時に、詭辨、妄論、及び知らす識らす口上談話に闖入する等の欠点を發見し、以て疑問を研究する正確なる進歩と確實なる決定を達するに助けんとを要す。(ろ)生國の有名なる著者の書籍を學習すると、即ち意義に富み、及言辞の雅致を以て秀てたる文章を、理論的及美妙的に之を研究し、之を讀み、又其中より最良の要点、若くは重要なる短き全文を諳記するおとも也。就中最後の者い、直接に自由にして且つ雅致なる説教に熟練するの開發を助く、如何となれば多くの眞理と思想を以て智識を富ましめ、及び多くの表言、斡旋及定則と以て言辞を富ましむれば也。是れ獨り準備せられたる文句を用ひ得べきのみならず、尚は且つ自己の斡旋及表言の之

と同樣なる構成をも容易ゝ講說するとを得るに至れゞなり。

神學上の敎育に於て即席說敎の最良の準備となるものゝ、(ア)說敎者の須らく聖書を熟知すべきことなり、即ち一々聖書を繙き、又ゝ聖書を眼前ゝ有せざる可からざる必要なく、其必要ゝ應ト、聖書の意義を利用し得るのみならず、乃ち其經句を利用し得るとなり。故ゝ又聖書より可成多くの個所を記憶せざる可からざるや明かなる事實ゝして、說敎者ゝ斯の如き貯蓄の餘裕あるゝ從ひ、說敎の材料を得、且つ純乎たる說敎の材料を得ん。實ゝ經典の神聖なる本文は、凡ての場合ゝ於て說敎者の爲ゝ眞理、譬喩、摸範、及剩へ說敎の表言の盡きざる礦坑なり。(イ)之に次で學ぶべきものは、敎會の有名なる敎師の說敎集なり。之を學ぶにゝ其意義上のみならず、乃ち文字の儘ゝ幾多のものを記憶するも亦甚た有益なり。神父等の說敎は常ゝ其意義ゝ富めるのみならず、各特質を以て秀で、

且つ其說敎は大抵說敎者の爲ゝ書せし即席說敎なりと雖ども、準備されざる口述の說敎ゝ、聽衆ゝ明白ゝ理會さるゝよりゝ、寧ろ能く感せしむるの特質を有す。斯の如く通例の談話ゝ近く、自由自在ゝして平易明瞭を有し、且ッ言語の品格を存する說敎を學ぶには、敎會の有名なる敎師の即席說敎に由るを以て最も可なりとす。(ウ)概して學術上の問題、殊ゝ敎の眞理を嚴格精密に識ることは是也。時として吾人は實際具さに知らざるとをも全く知れりとなすとあり。此れ自己の知り得たるゝとを他人ゝ口授する時に於てのみ顯はるゝものなれども、此等の問題を紙上ゝ叙述するゝ方りてゝ、斯の如き欠点を補ひ、若くは之を矯正すると敢て難きにあらず、唯即席の時ゝ於ては、書籍ゝ代ふるに記憶を以てせざるべからず。

第百廿九章　即席說敎に錬習すべきを論ず

未た能く說敎を記載することを學ばずして濫りに即席をなすべからず。否れば淺薄にして接續なく意義なき對話に慣習することを得るも、充分自己の思想を紙上に叙述することを得たりとて、突然講座より即席說敎をなすに勇むこと能わざる也。凡そ何事に於ても預備次第ある錬習の必要なるが如く、即席に於ても亦然らざるべからざる。說敎の業務に於ても記載したる準備の說敎なくして漸々聖堂の講話に自己の慣習を得べしと雖ども、概して牧者の本務に備ふるの時に於て、意の如く已の思想を叙述するに鍛錬を得るわ當然にして、且つ一層善良なりとす。而して之が最好の方法となる者わ、則ち經驗ある敎師の指導に依り、學生をして即席說敎に錬習せしむるに在りとす。

此種の錬習と成立するものは左の如し。

(ア) 說敎者をして他人の準備したる說敎を取り、其首もなる意義、即ち其

關係順序等に注目するのみならず、尙其解釋の順序に注意しつゝ之を通讀し、然る後他人の說敎を文字に拘泥せず、意義によりて成る可く完全精密に再造し、以て悉く自己の言語を以て授けしむるなり。

(カ) 自己の說敎を組織するに當りて、其重もなる部分を構成し、亦個々の思想を配置する点より最も嚴格なる辨別をなし、及說敎を其全體に於ても、精密の点に於ても完全なる文章の要求を滿足する樣に之を精製することを務むるを要す。尋で又思想の解釋及叙述に於ては、其詳細なる点に注意せずして、唯說敎の能く精製したる意義を再現しつゝ、之を其聽官に聞ゆるが如く正しく發音すべし。問題を熟慮し、及最も明瞭に完全に其解釋の精密を腦裏に觀念するに從ひ、之を口述するの言語及幹旋を發見すること容易なるに至らん。此に依て筆記したる多くの說敎わ之を記憶せざるも、能く思想と言語の密着の關係に由て、文面の儘に復

言することを得。然れども口頭の談話に於ては然らず、而して說敎者の靈に於ける內部の勞働い、凡ての才能を運動せしめつゝ、自然に說敎者を煖め之を活動せしむるものなるが故に、說敎者の瞬間に組織された る新表言及斡旋は、其行文の際に於て使用せるものよりも一層思想と感情とに適當す。斯の如き錬習い其利益甚多し、即ち說敎者をして即席に慣れしむると同時に、能く筆記物を叙述するの一助とならしむるもの也。蓋し吾人の思想と感情い、唯草稿にのみ依賴する間は凡て吾人の文章に於て滿足する者の如しと雖ども、奈何せん吾人い自己の言語を以て聽衆に向ふときい、全く其然らざることと感ずるなり。即ち紙上に於て明瞭平易にして且つ適當なるものと顯はれし所の事も、之を活言を以て叙述するに方りてい、其思考せし所に附合すること殆と稀にして或い全く其思考せし所のことに齟齬する事さへある者なり。是に依

て筆記したる說敎を、活言を以て叙述するの經驗い、即ち說敎を組織するの經驗となり、及說敎の要求に應じて之を矯正するの指示となるものなり。

(サ) 說敎者い豫め其腦裏に說敎の全体を描くに先たちて、說敎の精密なる構造、即ち圖式を書し、及其各部分を思考す可し。又其問題の意義充分確定し、及一の完備なる者を構成する所の順序を整ふるや、直に同問題につきて種々なる他の判斷、若くい問題に對する自己の見解を增補し、或い之を布衍し、及概して其意義に餘裕あらしめんが爲に、說敎の材科に適當なる經句の解釋を通讀するを有益なりとす。斯の如く說敎の爲に全材科を準備し、然後初めて即席說敎をなすべきなり。若し圖式の組織完全平易にして全く理論の法則に適ひ、且其中の各說にして意義に富む時は、則ち斯の如き圖式に依るの即席は經驗なき即席者にすら尙

便益あること顯然たるを以て、之と反對の場合とに於ては、即席者い自ら直に其組織せる構造の不完全なるを感せしむると雖ども、尚ほ彼をして前きと認めたる說敎構造法の欠点を避けしむるの利益あり。

(ダ)何事も筆記せず、唯或問題を選びて腦中に、說敎の圖式、及其各部を明解するの預畫と組織し、多少長時間之を思考すべし。此時と際しては、說敎の文句及幹旋の組織に注意せざるべからず。瞬間に思考せる說敎の表言及定則は、即席を容易ならしめんよりは、寧ろ即席說敎の自由を妨碍せん。されば即席者い宜しく全力を擧けて說敎の意義、思想の明瞭及其關係に注かざるべからず。之を要するに即席に方りてい、說敎の趣意をして恰も吾人の眼前に立たしむるが如くし、及吾人をして唯吾人が目擊する所のことを他人に授くるに止めしめんが爲なり。

第百三十章　即席說敎を始むる者と殊に如何なる欠点より預戒すべきや

即席說敎を始むる者の殊に預戒すべき欠点は左の如し。

(い)走語なり。草稿又は書籍に賴らずして錯雜なる思想の狀態を述ぶるに慣れざる者い、自然其場合に臨て熟知せりと思意せらるゝことを、恰も忘失せんことを危ぶみ、以て之を說述するに急ぐものなり。然れども、斯の如く急激に說話せんとするは、却て說敎者の思想及言語の自由の運轉を害することと甚たし。吾人い言語を急ぐと同時に、各思想を現出するが爲め、預め吾人の智慧中に正然たる表言を造りしが如くに述ぶるの才能を失ひ、及一思想を解明する中に、己に他の思想を準備して述ぶべき才能を失ふもの也。吾人が往々文句を始めて之を結ぶ能はず、或は其一を言ひ終り、次に接續して語るべきことを按出せざるおとあるい、之が爲なり。

(ろ)言語の枝葉に渉るおとなり。是れ文章を嚴正綿密に構造することに

慣れざる者の著書中より往々ある所の通弊なり。然れども斯の如き傾向と抑制するゝ即席說敎より於て最も困難なりとす。假令ひ問題の首要なる材料の爲に副辞たるも、即席者ゝ其熟知せる問題、又ゝ自已の爲に最も便利なる問題より關してゝ、好んで副辞に止まり、而して其主意たる事物より對しては、徒らに必要なきが如き事を精密より言ひ露し、而して必要なるものゝ、却て適當の解釋をなさずして放棄するが如き等、凡そかゝる欠点の時に於てゝ諸物を総括するの習慣を形成し、或は實際の即席才能を養成するの代りより、約ね常より同一物につきて解釋する所の厭ふべき多言を育成するより馴致するものなり。(は)思想を發表する時の汎語及機械的斡旋と表言なり。敎師ゝ經驗より依て學生が學術の問題を精密に知るおとの足らざるよりして、屢々自已の答辞より於て汎議より走れるや否やを知ることを得。以上の弊害は特より天性多言より傾きたる人が即

席を實驗するより際して顯ゝるゝことたるや疑無し。斯の如き場合ゝ、蓋し智識の活動荏弱よして、言語は即ち思想を超過し、及思想を言語の後に牽引せんと欲するや明かなりと雖ども、之と全く反對の方向を取らざるべからず。蓋し思想ゝ言語を製出するものよして、即ち細分せる音響を以て外部の言語となる所の内部の言語なり。故より即席說敎を徒然の多言ならしめざらんと欲せば、說敎者の心裏より精强なる内部の働きを惹起すこと最も緊要なり。言語ゝ其働きを思想と感情とより受けざるべからず、而して此働きの活潑なるより從ひ、其說敎も亦自から快活となりて勢力を有するに至らん。若し之と反對ならんか、假令ひ長時間より渉る說敎と雖とも、却て蛙鳴蟬噪の嘲りを招くより至らん。

第百三十一章　以上より指示せる欠點を預戒し及即席術を成功する首要なる方法

以上に指示せる欠点を預戒し、及能く即席の才能を開發するに緊要なる方法は、公衆に向ふ時に當て避くべからざるの混雜錯乱あるよも係らず、泰然として其の問題に熱中し、且つ自覺の明瞭を保存する熟錬を得るに在り。華美なる演壇より即席の實驗となす時ハ、最も先づ此等に注意せざるべからず、然れども斯の如き實驗をなす所の者は、自ら充分に已を信用せざんバ、虚心平氣にして其發言すべきおとを考ふる能ハず、而して自己の說敎の趣意を混雜せりと感ぜる時ハ強て述ぶるよも及バざるべし、若し又此時說敎に於て中止及斷絶あり、漸々說敎者の心中に起れる不隨意なる擧動を鎭靜して自覺の明瞭に復し、及其内部の眼目を說敎問題に注ぐ時ハ、之を止むるの必要なし、說敎の始に於て虚心平易なる狀態を維持することの困難なるに隨て益々此時に生ずる匆忙を戒心せざるべからず、否れバ吾人ハ預め精練したる思想の順序

を破り、且つ自已の問題を叙述する所の導線を失ひつゝ、唯愈々混雜錯乱を來さんのみ。自ら已を勵ます秩序的の慣習の頗る困難のことたるや疑なしと雖ども、此事は獨り傳道の業事に必要なるのみならず、總て如何なる生活の爲にも亦高價なる果實を結ぶものなり。若し又其天性言語に巧ならざる者が公衆に向ふに當りて、自己に生ぜる混雜を制することと甚だ困難なる時ハ、宜しく其問題を紙上に叙述するの方法に依らざるべからず。然れども筆記物を授くるに時間を費し、及言語の接續に必要なる精心の安靜を得て混雜を矯正するが爲め、自己の說敎の大体を記憶するハ、又困難なき能ハざ。

第百三十二章　聖堂の講座より即席說敎をなすと論ぜ

凡そ已の業務に最も能く準備せる人ハ、非常の希望と熱心とを以て之を成し遂ぐるおとを得る者なり。是故に傳道の事たる、其困難なるよも

係いらず、常ゝ言語を以て社會ゝ立ち、且つ能く其被牧者を感化することを自認する所の牧者の心ゝ近からんことを希望するを得。牧者は己の教師たる本分を成遂ぐるに於て、己の才能ゝ依賴して之を輕視せざれば、其れと同時ゝ說教術を完成して、益々滿足を發見し、加ふるゝ此際其經驗は彼の爲ゝ最良の誘導とならん。されど、此場合ゝ於ても亦說教をして成功あらしめんが爲ゝいゝ、左の規約を示すも亦た無要にあらざる也。

(第一)說教の業務を始むるものゝ、即席說教をなさんことを急ぐべからず。唯牧者たる資格ゝ於て、豫め充分ゝ被牧者を觀察し、被牧者と互ゝ心靈的の交際をなすを緊要なりとす。殊ゝ被牧者の爲ゝ必要なるおとを述ぶる要求の活々たる感覺ゝ、先つ第一ゝ說教者をして其聽衆と自由の對話を始むるの時を定むることを得せしむ。此時に當りて說教者は

自から其言語が如何ゝ深く聽衆の靈魂を占領し、及貫徹する所の思想感情ゝ從ふかを認めん、而して此事ゝ於ける說教者の正當なる初步は、牧者將來の運動上ゝ大効果を有せん。

(第二)始めて聖堂の講座に於て即席說教を試むる時は、多少短簡なる說教を以て限るべきゝ當然ゝして、且つ思慮あることゝ云ふべし。說教者は能く己の業務に習熟せざる間は、殊に其業務ゝ注意し、而して既ゝ之を成遂ぐるゝ當ては、已れゝ對して要求せざるべからず。斯の如き法則ゝ、其聽衆の教育あるゝ隨ひて說教者の負擔も亦重しとす、而して常人ゝ對ひて說教する時と雖ども、かゝる聽衆ゝ言語の欠点を認知することゝ能ゝざるべしと誤解して、決して說教中ゝ不注意なることを述ぶべからず。蓋し說教の能力ゝ、其手練の價値ゝあらずして、其言語のよく聽衆を感化するゝ在れゝ也。又言語の感化力ゝ常に言語の內外の品格ゝ

關する者とす。

(第三)既に前述せるが如く、或特別なる場合を除くの外、之が豫備を爲さざれば、決して演壇より即席說敎をなすべからず。之をなさんには、能く準備すると共に、德義上の準備を以てすべし。說敎者が執行する所の聖体禮儀に於て說敎する時は、聖体機密を行ふの準備は亦之れが最良の一準備となるものなり。されど如何なる場合に於ても聖堂說敎の前に は、成べく自己の靈力を以て其問題に的中することを務めざるべからず。且つ此が爲に豫め思念を放散し、及心の平和を破ぶる所の萬事に戒心すべし。而して實驗ある說敎者は、今や說敎をなさんとするに際して は、豫め思考せる言語を尙ほ精密に再考せずして、唯其意義の要点を胸中に復考すべきことを勸說せり、如何となれば斯る場合に於て一々精密に注意するが如きは、却て說敎者の心を散乱せしむることあれば也。

故に此際說敎者は殊に自ら己を勵まし、務めて平夷ならんことを要す。

(第四)問題の殊に精密なる叙述を要する時、例へば或定理上の眞理を闡明する時の如きは、其述べんと欲する所のことを悉く紙上に舒ぶるを以て最も可なりとす。總て即席は實驗ある說敎者も尙自己の意の如くならざる筆記の說敎をも除くことなし、蓋し彼等も亦或る場合に於て、及或問題につきて豫め自己の思想を紙上に舒ぶるの有益なるを發見したれば也。されば尋常說敎者の爲に問題を紙上に舒ぶるの最緊要たるは、素より論を待たざる所なりと雖ども、吾人が切に希望するところは、唯だ筆記の說敎を述ぶるに當りても、成るべく草稿に碍げらるゝことなく自由に言語を使用するに在り。

結論

學術的教育と準備は、神言を宣傳する說教者が業務を履行するに當りて、如何に有益に且緊要なりとするも、學術い咸く說教者の業務の需用を滿足に供給するおと能いず。說教業務に於て最も主要なるものい、則ち言語の勸化力と其果實に富めることとして、教育と熟錬に關するの甚た稀なるおとい、吾人の屢々論辨せる所なり。吾人は怜悧果斷にして且つ能辨に語ると雖ども、其說教中に緊要なる果實の存せざることあり、何となれば吾人の言語い、聽衆をして惡行邪念を避けしめて善に移り、彼等を神の愛を以て暖め、以て彼等に神誡を行ふ上に於て實行の進歩を起さしむるに至らざれば也。果して然らん乎、說教者は何を以て斯る重大なる欠点を補はんや、說教者が千辛万苦を經て得たる所の熟錬い何と以て其結果を奏するや、說教者として此欠点を補ひ好結果を奏せんと欲せば、須く教會の聖として且つ睿智なる教師の教誨と摸範とに從ひ(第一)祈禱を以て神の神、睿智、智慧の神を自己に牽引し且つ(第二)自己の生活の行爲と摸範とを以て教を固むべきなり。

第一

說教い常に聖神の恩寵を以て印証せられざるべからず。說教の首要なる特質は亦此中に在り。若し說教として聖神の恩寵を以て印証せられずば、神言の說教とい唯其名のみとして、常人の演說と均としく無效力とならん。古代パリストス教の說教及說教の品格は、其中に存する恩寵の精神の豊否を以て測度せられたり、故に教會の聖なる牧者教師等い、人若し爲すべきが如く其事に準備せず、或い其智慧感情を、當て世智俗情より脫淨せず、或は聖神の恩寵を得ることを務めずして、唯だ他人を教ふることのみ勇む時は、聖なる眞理を冒すの罪と、眞理に對して不

敬なるとを咎めたり。されバ神學者聖グリゴリイハ、當時ハリストス教の教師輩の輕卒なることを責め、及眞正なる說教者の性質を示して左の如く云へり『余ハ現今ノ速成智者、即チ唯全ク智者タランヿヲ欲スル所ノ、新ニ起リタル神學者ニ於テ、言語ニ盡力スルノ疾病ヲ見ル時ハ、高尙ナル智識ノ必要ヲ感シ、イエレヤミト共ニ高尙ナル智者ノ隱所ヲ踪跡シテ同居センヿヲ希フナリ。、、如何トナレバ物質的ノヿヲ制シ、充分ニ聽官ト思想ヲ洗滌スル能力ナキ間ハ、自己ニ靈ニ於ケルノ慮リヲ受ケ、及神學ニ從事スルハ危難ナシトセズ』（主教を立つるに就ての說教及至聖三者に就ての說教）と。彼又他の個所に於て『余ハ多クノ者ノ言語、及今諸人ガ領スル所ノ傾向、即チ自己ニ神ヲ有セズシテ靈ノ事ヲ敎ヘ、之ヲ述ブル所ノ傾向ト希望ヲ抑制スルヿ能ハザルガ故ニ、緘默ノ例トナリテ他ノ者ヲ無言ニ敎フルノ他途ヲ步ムヲ以テ怜悧ナルコトト思フナリ』（第三卷拾九說教）と、云ひ

て、自ら說敎を辭せしは、一に他の多言なる敎師の緘默せんことを望みしなり。斯の如くハリストス敎會の神に照されたる敎師の釋義に據れバ、恩寵の精神なき說敎ハ、假令ひ其講ぜる所ハ心靈上の事實なるも、其聽衆と裨益せんよりは、寧ろ損害を與ふるなり、故に斯の如き說敎は緘默するの勝れるに如かず。敎會の聖神父等ハ敬虔の信用を以て、時に自己の事を叙べて、聖神は彼等の說敎を整理し、及彼等ハ聖神の恩寵に導かれて敎ふると云へり、即ち聖金口イオアンハ其說敎中にアンティオヒヤの人民に向ひ、直接に說て曰く、『余思フニ、余ガ之ヲ爾等ニ語ルハ已レニ由ルニアラズ、乃チ神此言ヲ以テ余ノ靈中ニ置ケルナリ』（アンティオヒヤ人民に對する說敎第二）と。神學者聖グリゴリイハ使徒たるの勇敢を以て已の事を證して曰く『余モ亦神ノ神ヲ有スルト思フ』（聖神學者の著書第四卷第十一章三十六の講解）と。福アウグスティンも亦た屢々己の勸說の『凡テ善ニシテ善果アル思想ハ皆聖

神余ニ勸ム』(アウグスティンの第十卷十六、十七の說教)と言へり。是に依て之を觀れば、凡て神の照耀は常ゑ眞正なる說敎者の卓越したる性質を組織するものなり。然れども說敎者の責任は今尙ほ變せざるが故ゑ、其說敎の首もなる性質も亦變易すべからず。何もの乎吾人をして上より降る所の恩寵ゑて照らされたる業務より左右するゑとを得んや。吾人の言語ハ曾て甚た勢力ありしも、今や無力のものとなり、吾人の感情は嚮きゑ强健ゑして且つ善なり易きものなりしも、今や最も薄弱ゑして惡なり易きものとなれり。吾人は說敎の業務ゑ於て、若し聖神の佑助なくんば、自己の勞力のみを以て亦何事をか爲し得んや。誰か他人の意識感情ゑ作動するの法を發明し、誠心を以て他人を己の命令敎誨勸說ゑ順はしむる者あらん。恐くは此の如き發明をなし得る者ハ一人たもあらざるべし、且つ吾人をして斯の如き大なる熟錬に指導し得る所の學術なきなり。是故に

說敎學の本務は其の吾人の爲ゑ定められたるとを完成して、其乏欠を補充し、其荏弱を鞏固にする所の施生の恩寵を天の敎師ゑ願ひ、且つ之を受けんが爲ゑ自己を以て睿智、智慧、能力の原因者たる天の敎師ゑ委ぬるに在り。

福アウグスティン曰く『敎會能辨家ノ能ク聽衆ニ作動シ得ル者ハ、唯誠實聖善ナルコトヲ公衆ニ敎フル時ニアリ。又其能ク聽衆ニ作動スルハ、眞實聖善ナルヿヲ、力メテ聽衆ノ理會スルガ如ク、且ツ好テ聽從スルガ如ク言ヒ顯ハシ得ル時ニ在リ。然レモ此働ニ於ケル進步ハ、辯說家ノ才能ヨリハ、寧ロ敬虔ナル祈禱ヨリ多ク須タザルベカラズ。說敎者ハ自己ノ爲メ、及聽衆ノ爲ニ祈リツヽ、說敎者トナランヨリハ、宜シク先ツ祈禱者トナルベシ。又說敎者ハ講座ニ登リ己ノ口ヲ開クニ先タチテ、神ニ熟心ナル己ノ靈ヲ獻グベシ、而シテ神恩ニ依テ彼自ラ飲マシメラレタル

モノヲ吐露シ、並ニ自己ノ全心全力ヲ盡シテ注射スベシ、蓋シ吾人ニ何事ヲ話スベキヤ、如何樣ニ語ルベキヤヲ敎フル者ハ、神ノ外誰カアル、且ツ吾人ト吾人ノ言語トハ皆神ノ右手ニ在レバナリ。故ニ自ラモ學ビ、他人ヲモ敎ヘント欲スル者ハ。須ラク敎誨ノ問題ヲ學ブベク、又敎會ノ人ニ適當ナルガ如ク述ブルノ才能ヲ求ムベシ。而シテ說敎ノ時至ルマデハ宜シク主ノ左ノ言ヲ銘記スベシ「如何ニ何ヲ言ハント思ヒ煩フ勿レ、其時言フベキ事ハ爾曹ニ賜ハルベシ、是レ爾等自ラ言フニ非ズ、爾曹ノ父ノ靈其衷ニ在テ言フナリ」（マトフェイ十九、廿）と（ハリストス敎の學術四ノ三十二）。視よ學術を以て說敎の業務に備へ、自己の凡ての熟錬と敎育を此務に獻せんと欲し、及聖なる說敎の業務に入る者は最も適當なるものは怜悧にして救贖となるべき勸說なるを。

第二

性格に於て第一の規約と異ならざる說敎に於ける進步の他の規約い、說敎者の言語と其行爲の齟齬せざるに在り。救主自ら言へることあり、曰く、「凡ソ之ヲ行ヒ、且ツ人ニ敎フル者ハ、天國ニ於テ大ナル者ト謂ハン」（マトフェイ五ノ十九）と。吾人い知る、彼は前に行ひと云ひ、然る後敎ふと言へるい、是れ行い唯言の後にのみ繼續すべきものに非ずして、乃ち言に先んぜべきの謂なることを。されば說敎者は自己の本分により、己の行と言とを以て、常に聽衆の品行を形成する所の摸範たらざるべからず。故に說敎者の敎と行の相矛盾するは、其說敎をして全く無傚たらしむる也。福アウグスティン曰く「眞理ハ之ヲ非眞理ニモ傳ヘラル、ヿヲ得、即チ不正ナル虛僞ノ心ヲ有スル者モ、亦正シク且ツ眞實ナルヿヲ傳フルハ實事ナリ。善良ナル「ハリスティアニン」ハ順從ナルヲ以テ、斯ル場合ニ於テ人ニ注意セズ、其人ノ如何ニ係ハラズ、凡テ彼等ガ爾曹ニ言フ所ヲ守リテ行

フベシ、然レドモ彼等ガ行フ所ヲ爲スヿ勿レ、蓋シ彼等ハ言フノミニシテ行ハザレバ也。（マトフェイ二十三ノ三）ト云ハレシ主ノ言ヲ記憶スルナリ。然ドモ聽衆中時トシテハ自己ノ惡行ノ辨護ヲ心中ニ考ヘ、剩ヘ說敎者ニ何ノ爲ニ爾ハ吾ニ誡ムルコトヲ自ラ行ハザルヤト眼中ニ謂ヒツヽ、自己ノ首長及敎師ノ行爲ニ求ムル者鮮ナシトセズ、視ヨ人々ハ自ラ自己ニ注意セザル者ニ順從セズ、且ツ說敎者ヲ輕蔑スルト共ニ、彼カ傳フル所ノ神言ヲモ輕蔑スルハ何ヨリ生ズルカヲ』（ハリストス敎の學術五十九章、六十章）。

之ヨ反して說敎者の善行ある時は、其說敎は說敎者の行ヨ於て活動するを以て、常ヨ敎化力を有す。蓋し聽衆ハ既ヨ說敎の結果を目擊するが故ヨ、其種子の良質なるを信用せざるを得ざれバなり。斯の如き機會ヨ於て少しく說敎に熟錬したる說敎者ハ、說敎ヨ熟錬なるも「ハリスティアニン」の生活ヨ熟錬せざる說敎者に比すれバ、一層勸化的ヨ說敎をする

を得べし。又彼は縱ひ如何ヨ說敎せしにもせよ、常ヨ愧ぢずして說敎す、蓋し彼は苛責と感ぜることなく、其言語ハ美ならざるも、行爲は善美ヨして生活しあれバ也。彼は其言語に於て言ひ盡さゞることをバ、行爲の上ヨ補ひ、彼の言語ハ能辯を以て秀でざれども、能辯ヨ代ふるヨ、凡て被牧者の爲ヨ述ぶるの必要ありと思ふ所のことハ、感化を以て叙述し、彼が規責する時は則ち被責者ヨ慚愧を起さしむ。蓋し如何なる僻惡者も、義人の規責の前ヨ愧なくして立つと能ハざれバ也。彼が懲戒する時は則ち懲戒せらるゝ者をして自から其心中ヨ戰慄せしむ。蓋し說敎者自らが懲戒する所のおとより救はれんおとを勉むれバ也。彼が約束する時は即ち被牧者をして其約束を履行せんと欲するの希望を起さしむ。蓋し說敎者自ら將來の福樂ヨ進むことに於て他人ヨ先んずれバ也。彼が慰藉する時は則ち心に喜悅を漂溢せしめ、彼が悲歎憂愁ヨ沈む時ハ

則ち聽衆をして亦た憂愁悲歎ゝ向ハしむ。蓋し說敎者は何時も善を僞らざれバ也。其言の權ある既ゝ斯の如し、而して其言語の權ある所以のものは、行ひて而る後語り、行爲を以て其言を確むるゝ由るなり。是故ゝ若し行を言より取り去らん乎。言語ハ恰も根なき植物の如く、其中ゝ生命なく、隨て果實を待つこと能ハざらん。

聖使徒パウェル其愛する所の弟子テモフェイに、エフェス信者の治理を依托しつゝ彼ゝ誡て曰く、「言ト行ト愛ト靈ト信ト潔ヲ以テ信者ノ模楷ト摸楷トナレ」（テモフェイ前書四ノ十二）と。此言は獨りテモフェイゝ關するのみならず、凡そ「ハリスティアニン」の靈の救を慮る所の者ゝも亦均しく關するの格言たり。而して我等の本務は、唯聖使徒の此不變なる規則ゝ循て行ふ時ゝ於てのみ其好結果を奏せん。然らずんバ吾人の敎育技藝才能も亦必ずハリストス敎會の幸福ゝ裨益する所なからん。

敎會說敎學畢

正誤

頁	行	誤	正
一九	二	序述	叙述。
仝	五	仝上	仝上
五二	七		教會ノ下ノヲ脱ス。
六七	六	序述	叙述。
一三五	十		其門徒ノ上ニ『。』ヲ脱ス
一六八	一		事ノ上ニ。ヲ脱ス
一六八	九	我濟	我儕。
一八一	八	奉禮禮儀	奉神。禮儀
二一一	五	諧謔	諧。詼
二一二	一二	性質	性。質
二四〇	四	論を	論ず。
三一一	一	乏欠	欠乏
三一二	九	熟錬	熟。錬
三一六	七	模楷ト摸楷ト	模楷ト

明治二十五年八月四日印刷
明治二十五年八月十一日出版

翻譯兼發行者　木村英吉
東京市神田區駿河臺北甲賀町拾三番地

印刷者　岡本利三郎
東京市麹町拾丁目四番地

發行所　正教會
東京神田區駿河臺東紅梅町六番地

8

020957-000-1

68-297

説教学

エヌ・ファウォロウ／著

M25

ABI-0809